

有価証券報告書

(金融商品取引法第24条第1項に基づく報告書)

事業年度	自	2017年4月1日
(第18期)	至	2018年3月31日

株式会社アドウェイズ

東京都新宿区西新宿八丁目17番1号

(E05599)

目次

頁

表紙

第一部 企業情報	1
第1 企業の概況	1
1. 主要な経営指標等の推移	1
2. 沿革	3
3. 事業の内容	4
4. 関係会社の状況	6
5. 従業員の状況	7
第2 事業の状況	8
1. 経営方針、経営環境及び対処すべき課題等	8
2. 事業等のリスク	9
3. 経営者による財政状態、経営成績及びキャッシュ・フローの状況の分析	12
4. 経営上の重要な契約等	16
5. 研究開発活動	16
第3 設備の状況	17
1. 設備投資等の概要	17
2. 主要な設備の状況	17
3. 設備の新設、除却等の計画	18
第4 提出会社の状況	18
1. 株式等の状況	18
2. 自己株式の取得等の状況	23
3. 配当政策	24
4. 株価の推移	24
5. 役員の状況	25
6. コーポレート・ガバナンスの状況等	29
第5 経理の状況	34
1. 連結財務諸表等	35
(1) 連結財務諸表	35
(2) その他	60
2. 財務諸表等	61
(1) 財務諸表	61
(2) 主な資産及び負債の内容	69
(3) その他	69
第6 提出会社の株式事務の概要	70
第7 提出会社の参考情報	71
1. 提出会社の親会社等の情報	71
2. その他の参考情報	71
第二部 提出会社の保証会社等の情報	72
[監査報告書]	

【表紙】

【提出書類】	有価証券報告書
【根拠条文】	金融商品取引法第24条第1項
【提出先】	関東財務局長
【提出日】	2018年6月28日
【事業年度】	第18期（自 2017年4月1日 至 2018年3月31日）
【会社名】	株式会社アドウェイズ
【英訳名】	Adways Inc.
【代表者の役職氏名】	代表取締役 岡村 陽久
【本店の所在の場所】	東京都新宿区西新宿八丁目17番1号
【電話番号】	03-5331-6308
【事務連絡者氏名】	上席執行役員 管理担当 田中 庸一
【最寄りの連絡場所】	東京都新宿区西新宿八丁目17番1号
【電話番号】	03-5331-6308
【事務連絡者氏名】	上席執行役員 管理担当 田中 庸一
【縦覧に供する場所】	株式会社東京証券取引所 （東京都中央区日本橋兜町2番1号）

第一部【企業情報】

第1【企業の概況】

1【主要な経営指標等の推移】

(1) 連結経営指標等

回次	第14期	第15期	第16期	第17期	第18期
決算年月	2014年 3 月	2015年 3 月	2016年 3 月	2017年 3 月	2018年 3 月
売上高 (千円)	31, 521, 529	35, 890, 983	39, 613, 864	42, 329, 478	41, 501, 338
経常利益 (千円)	840, 911	1, 197, 126	744, 122	248, 208	575, 959
親会社株主に帰属する当期純利益又は親会社株主に帰属する当期純損失(△) (千円)	551, 678	686, 504	145, 658	△450, 825	9, 977
包括利益 (千円)	767, 257	1, 042, 810	24, 546	△279, 006	84, 407
純資産額 (千円)	11, 808, 334	13, 090, 790	12, 489, 728	11, 051, 530	11, 022, 904
総資産額 (千円)	17, 748, 617	19, 806, 604	19, 950, 802	18, 316, 780	17, 921, 916
1株当たり純資産額 (円)	287. 66	310. 44	302. 18	281. 92	281. 05
1株当たり当期純利益金額又は1株当たり当期純損失金額(△) (円)	14. 45	16. 81	3. 51	△11. 11	0. 26
潜在株式調整後1株当たり当期純利益金額 (円)	14. 04	16. 46	3. 51	－	0. 26
自己資本比率 (%)	66. 0	65. 2	61. 7	59. 6	60. 8
自己資本利益率 (%)	6. 7	5. 6	1. 2	△3. 9	0. 1
株価収益率 (倍)	108. 2	58. 1	233. 2	－	1, 976. 7
営業活動によるキャッシュ・フロー (千円)	868, 109	1, 049, 821	477, 057	△53, 650	1, 095, 023
投資活動によるキャッシュ・フロー (千円)	662, 773	△412, 974	△763, 394	△987, 083	188, 958
財務活動によるキャッシュ・フロー (千円)	6, 137, 996	205, 457	△599, 974	△1, 164, 231	△156, 710
現金及び現金同等物の期末残高 (千円)	10, 594, 241	11, 518, 727	10, 635, 272	8, 317, 330	9, 491, 272
従業員数 (人)	761	786	837	856	842
(外、平均臨時雇用者数)	(70)	(71)	(192)	(216)	(193)

(注) 1. 売上高には消費税等は含まれておりません。

2. 1株当たり当期純利益金額又は1株当たり当期純損失金額(△)並びに潜在株式調整後1株当たり当期純利益金額は、自己株式を控除した期中平均発行済株式総数により、1株当たり純資産額は、自己株式を控除した期末発行済株式総数により算出しております。

3. 1株当たり純資産額、1株当たり当期純利益金額及び潜在株式調整後1株当たり当期純利益金額については、2013年10月1日付で当社普通株式1株につき500株の割合をもって株式分割を行ったことをふまえ、2014年3月期の期首に同株式分割が行われたものと仮定し当該数値を算出しております。

4. 第15期の数値は、誤謬の訂正による遡及処理後の数値であります。

5. 第17期の潜在株式調整後1株当たり当期純利益金額については、潜在株式は存在するものの1株当たり当期純損失金額であるため記載していません。

6. 第17期の株価収益率については、親会社株主に帰属する当期純損失であるため記載していません。

(2) 提出会社の経営指標等

回次	第14期	第15期	第16期	第17期	第18期
決算年月	2014年 3 月	2015年 3 月	2016年 3 月	2017年 3 月	2018年 3 月
売上高 (千円)	27, 077, 334	28, 654, 830	32, 053, 275	36, 347, 006	35, 648, 888
経常利益 (千円)	912, 229	718, 293	912, 746	903, 790	853, 362
当期純利益又は当期純損失(△) (千円)	655, 976	352, 676	315, 897	△139, 222	48, 933
資本金 (千円)	1, 489, 910	1, 603, 169	1, 605, 258	1, 605, 258	1, 605, 955
発行済株式総数 (株)	40, 722, 500	41, 568, 500	41, 583, 500	41, 583, 500	41, 588, 500
純資産額 (千円)	10, 857, 562	11, 598, 248	11, 236, 186	10, 226, 124	10, 203, 984
総資産額 (千円)	16, 220, 519	16, 512, 852	17, 010, 581	15, 969, 003	15, 572, 399
1株当たり純資産額 (円)	265. 44	277. 52	274. 40	263. 79	263. 19
1株当たり配当額 (円)	—	3. 36	2. 35	2. 35	2. 35
(うち1株当たり中間配当額)	(—)	(—)	(—)	(—)	(—)
1株当たり当期純利益金額又は1株当たり当期純損失金額(△) (円)	17. 18	8. 64	7. 62	△3. 43	1. 26
潜在株式調整後1株当たり当期純利益金額 (円)	16. 69	8. 45	7. 61	—	1. 26
自己資本比率 (%)	66. 6	69. 9	65. 7	64. 0	65. 5
自己資本利益率 (%)	8. 8	3. 2	2. 8	△1. 3	0. 5
株価収益率 (倍)	91. 0	113. 1	107. 5	—	403. 0
配当性向 (%)	—	38. 9	30. 8	—	186. 1
従業員数 (人)	380	421	436	496	509
(外、平均臨時雇用者数)	(10)	(14)	(30)	(58)	(69)

(注) 1. 売上高には消費税等は含まれておりません。

2. 1株当たり当期純利益金額又は1株当たり当期純損失金額(△)並びに潜在株式調整後1株当たり当期純利益金額は、自己株式を控除した期中平均発行済株式総数により、1株当たり純資産額は、自己株式を控除した期末発行済株式総数により算出しております。

3. 発行済株式総数、1株当たり純資産額、1株当たり配当額、1株当たり当期純利益金額及び潜在株式調整後1株当たり当期純利益金額については、2013年10月1日付で当社普通株式1株につき500株の割合をもって株式分割を行ったことをふまえ、2014年3月期の期首に同株式分割が行われたものと仮定し当該数値を算出しております。

4. 第15期の1株当たり配当額には、記念配当1円1銭を含んでおります。

5. 第15期の数値は、誤謬の訂正による遡及処理後の数値であります。

6. 第17期の潜在株式調整後1株当たり当期純利益金額については、潜在株式は存在するものの1株当たり当期純損失金額であるため記載していません。

7. 第17期の株価収益率については、当期純損失であるため記載していません。

8. 第17期の配当性向については、当期純損失であるため記載していません。

2 【沿革】

年月	事項
2000年 8 月	当社代表取締役岡村陽久が大阪市東淀川区にて、個人事業としてインターネット専門の広告配信ネットワークサービスを目的とした「アドウェイズエージェンシー」を創業
2001年 2 月	大阪市東淀川区西淡路一丁目11番23号に株式会社アドウェイズ（資本金1,000万円）を設立
2001年 4 月	成果報酬型広告サービス「Adways Network」を提供開始
2001年 8 月	成果報酬型広告サービス「Adways Network」（モバイル版）を提供開始
2002年 5 月	本社を大阪市東淀川区西淡路一丁目 3 番32号に移転
2002年 6 月	台東区東上野三丁目30番 1 号に東京オフィスを開設
2003年 6 月	「Adways Network」（モバイル版）をバージョンアップし、成果報酬型広告サービス「スマートクリック」を提供開始
2003年 8 月	「Adways Network」（PC版）をバージョンアップし、成果報酬型広告サービス「JANet」を提供開始
2003年12月	中国上海市にシステム開発拠点として、愛徳威軟件開発（上海）有限公司を設立（連結子会社）
2004年 2 月	「スマートクリック」をバージョンアップし、成果報酬型広告サービス「Smart-C」を提供開始
2004年 4 月	株式会社セブテーニから成果報酬型広告システム「AD4commerce」の全営業権を譲受け
2004年 9 月	本社を台東区東上野三丁目30番 1 号（東京オフィス）に移転
2004年12月	本社を台東区東上野六丁目 9 番 3 号に移転
2006年 5 月	本社を新宿区西新宿六丁目 8 番 1 号に移転
2006年 6 月	東京証券取引所マザーズ市場に株式を上場
2007年 2 月	中国上海市に営業拠点として、愛徳威広告（上海）有限公司を設立（連結子会社）
2007年 6 月	伊藤忠商事株式会社との資本業務提携
2008年 8 月	モバイルコンテンツ事業を運営するトイビィー・エンタテインメント株式会社の株式を取得して子会社化し、商号を株式会社アドウェイズ・エンタテインメントに変更（連結子会社）
2008年11月	株式会社ビバフリークからフリーペーパー事業の一部事業の譲受け
2009年 4 月	株式会社アドウェイズ・プラネット（現 株式会社おくりバント）を設立（連結子会社）
2009年 6 月	コスメ・美容における出版事業を運営する株式会社ベルブックスの株式を取得して、商号を株式会社アドウェイズブックスに変更（連結子会社）
2009年 7 月	株式会社プロデュース・アソシエーションからモバイルコンテンツ事業を譲受け
2010年 3 月	株式会社アドウェイズブックス（連結子会社）の全株式を譲渡して連結から除外
2010年11月	スマートフォンアプリ向け広告サービス「AppDriver」を提供開始
2011年 3 月	株式会社IMJモバイルからモバイルアフィリエイト広告事業を譲受け
2011年 7 月	株式会社ラビオンソーシャルの株式を取得し、スマートフォンアプリ事業を強化（連結子会社） 香港にADWAYS ASIA HOLDINGS LTD. を設立（連結子会社） 香港にADWAYS TECHNOLOGY LTD. を設立（連結子会社）
2011年11月	伊藤忠商事株式会社への第三者割当てによる自己株式の処分により、伊藤忠商事株式会社の持分法適用会社になり資本・業務提携を強化 シンガポールにADWAYS INNOVATIONS SINGAPORE PTE. LTD. を設立（連結子会社）
2012年 3 月	株式会社ディー・エヌ・エーと広告事業及びソーシャルゲーム事業において戦略的提携
2012年 4 月	米国に子会社 ADWAYS INTERACTIVE, INC. を設立（連結子会社） 台湾において傑思媒體事業股份有限公司の株式を取得して、商号をJS ADWAYS MEDIA INC. に変更（連結子会社）
2012年 5 月	株式会社アドウェイズ・エンタテインメント（連結子会社）の全株式を譲渡して連結から除外 株式会社サムライリンク（現 株式会社サムライ・アドウェイズ）の株式を取得して子会社化（連結子会社）
2012年 7 月	株式会社アドウェイズ・ラボット（現 ラボット株式会社）を設立（連結子会社）
2012年 9 月	株式会社muamua games（現 株式会社パシオリユース）を設立（連結子会社）
2012年10月	株式会社Adways Frontier（現 Brasta株式会社）を設立（連結子会社） 韓国に子会社 ADWAYS KOREA, INC. を設立（連結子会社）
2013年 4 月	株式会社アドウェイズ・スタジオ（現 株式会社七転八起）を設立（連結子会社） ライヴエイド株式会社の株式を取得して関連会社化
2013年 5 月	株式会社サムライベビーを設立（連結子会社）

年月	事項
2013年 7 月	Bulbit株式会社を設立（連結子会社）
2013年12月	コパン株式会社の株式を取得して子会社化（連結子会社）
2014年 5 月	本社を新宿区西新宿八丁目17番 1 号に移転
2014年10月	株式会社トロピックスメディア（現 株式会社楽一番）の株式を取得して子会社化（連結子会社）
2014年12月	株式会社アドウェイズ・サポート（現 株式会社アドウェイズ・フロンティア）を設立（連結子会社）
2015年 9 月	香港にADWAYS HONGKONG LTD. を設立（連結子会社）
2015年10月	香港にADWAYS TECHNOLOGY HONGKONG LTD. を設立（連結子会社）
2015年11月	株式会社アイドテック（現 株式会社MAGICA）を設立（連結子会社）
2016年 5 月	インドにADWAYS INNOVATIONS INDIA PVT. LTD. を設立（連結子会社）
2016年 8 月	Mist Technologies株式会社の株式を取得して子会社化（連結子会社）
2016年 9 月	株式会社パシオリュース（連結子会社）の全株式を譲渡して連結から除外
2017年 4 月	株式会社サムライベイビー（連結子会社）の全株式を譲渡して連結から除外 ADWAYS TECHNOLOGY VIETNAM JSC（非連結子会社）のソフトウェア開発事業をLINE Vietnam Co.,Ltdへ譲渡
2017年 5 月	スマートフォン向け広告プラットフォーム「UNICORN」を提供開始
2017年 8 月	コパン株式会社（連結子会社）の全株式を譲渡して連結から除外 台湾にENRICHMENT MEDIA INC. を設立（連結子会社）
2017年12月	株式会社ラビオンソーシャル（連結子会社）の全株式を譲渡して連結から除外
2018年 1 月	Brasta株式会社（連結子会社）において株式会社ステージパスよりインフルエンサーを起用したコラボレーション事業を譲受け

3【事業の内容】

当社グループは、当社（株式会社アドウェイズ）と連結子会社24社、非連結子会社4社及び持分法適用関連会社2社の計30社で構成されており、日本やアジア及び北米において、PC及びスマートフォンを含む携帯端末向けにマーケティング活動を行う広告主（クライアント）と当社提携メディアを、当社の運営するアフィリエイトサービスを通じて繋ぐ、アフィリエイトサービスプロバイダー（以下、「ASP」という。）として、アフィリエイトを中心としたインターネット広告サービスの提供等を行っております。

広告事業におきましては、Webサイト運営者やコンテンツプロバイダー、スマートフォン向けアプリ開発会社を広告主（クライアント）とし、これらとWebサイトやゲームアプリ等のメディアを当社の広告システムでつなぐ、ASPを主として事業の展開を行っております。大手ゲームプラットフォームや有力メディアとの提携等をはじめとして提携メディアを拡大するとともに、当社の主力のインターネット広告事業におけるスマートフォン領域において、新たな広告プラットフォームであるUNICORNを2017年5月にリリースする等、事業の拡大に注力しております。

アプリ・メディア事業におきましては、主に連結子会社である愛徳威軟件開発（上海）有限公司等においてスマートフォンアプリの開発・運営、連結子会社である株式会社サムライ・アドウェイズにおいてメディアの運営等を行っております。

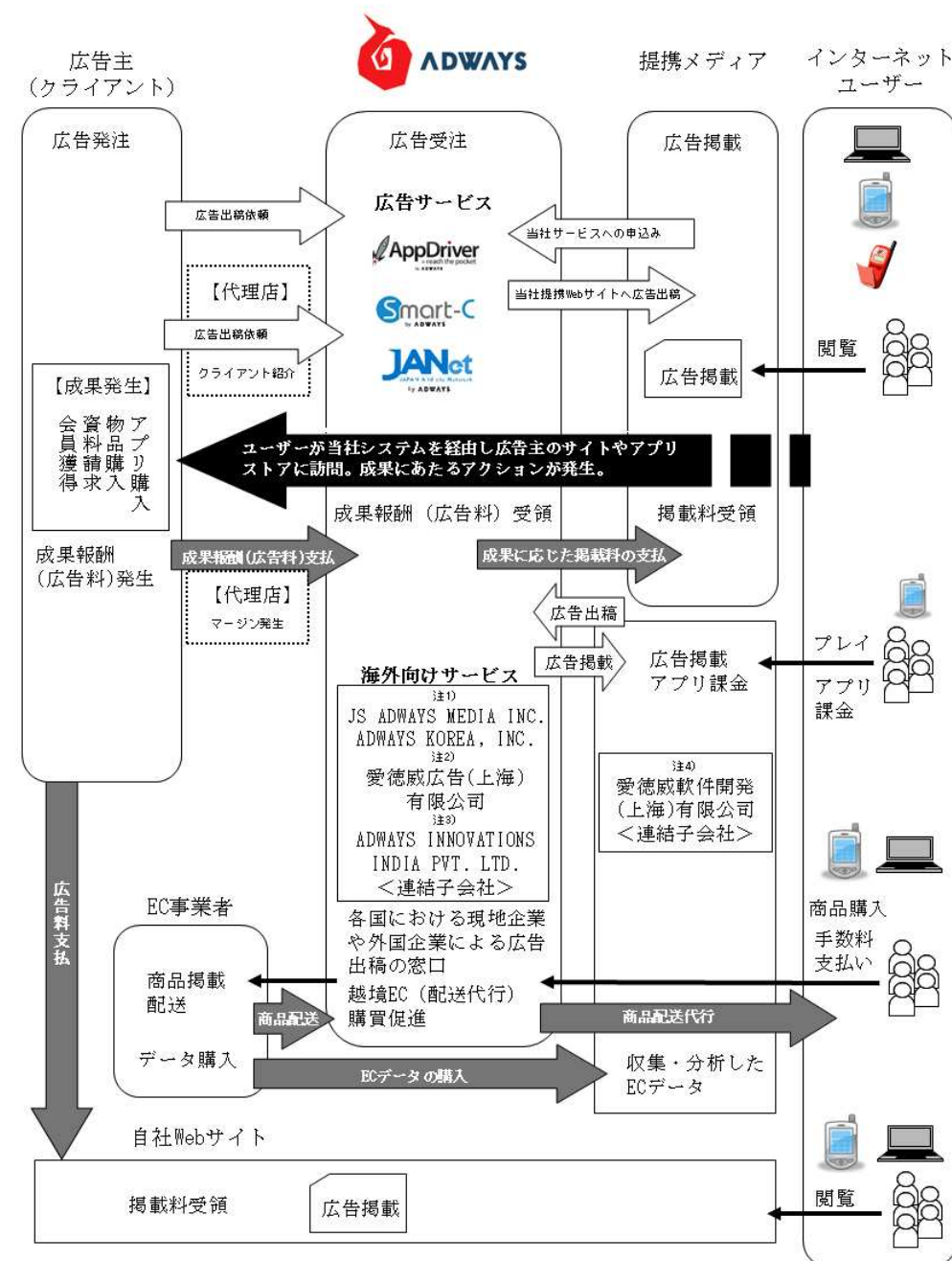
海外事業におきましては、中国・香港・台湾・韓国・米国・シンガポール・インドにおいて、現地企業と各国における外国企業を対象として、インターネットマーケティングの総合支援サービスを提供しており、また、主に前述の地域を主たるマーケットとして想定しているプロダクトの開発や運営、並びにサービスを提供しております。特に中国・台湾・韓国を中心としたアジア地域のスマートフォン領域で存在感を高めるため、積極的に事業拡大を図っております。

当社グループの主な事業内容は、上記の「広告事業」、「アプリ・メディア事業」、「海外事業」に分類されます。なお、この3部門は「第5 経理の状況 1 連結財務諸表等 (1)連結財務諸表 注記事項」に掲げるセグメントの区分と同一であります。

なお、ADWAYS INNOVATIONS INDIA PVT. LTD. において、2018年4月1日付けで、ADWAYS VC INDIA PVT. LTD. へAndroidアプリ「Pocket Money」事業を譲渡いたしております。また、2018年4月3日付けでADWAYS TECHNOLOGY LTD. の当社が保有する株式167,500株（発行済株式総数の67.0%）を譲渡いたしております。

[事業系統図]

事業系統図は以下のとおりであります。



4 【関係会社の状況】

名称	住所	資本金又は 出資金	主要な事業内容	議決権の 所有割合 (%)	関係内容
(連結子会社) 愛徳威軟件開發 (上海) 有限公司	中国 上海市	1,000千USD	アプリ・メディア 事業、海外事 業及びその他	100	①役員の兼任1名 ②営業上の取引 ・アプリ事業における運営委託及び開 発委託 ③設備の賃貸 該当はありません
愛徳威広告 (上海) 有限公司	中国 上海市	1,000千USD	海外事業	100	①役員の兼任1名 ②営業上の取引 ・広告事業及び海外事業における代理 販売 ③設備の賃貸 該当はありません
JS ADWAYS MEDIA INC.	中 華 民 国 台北市	1,880千TWD	海外事業	66 (66)	①役員の兼任1名 ②営業上の取引 ・広告事業及び海外事業における代理 販売 ③設備の賃貸 該当はありません
ADWAYS KOREA, INC.	韓 国 ソウル市	1,900,000 千KRW	海外事業	100	①役員の兼任1名 ②営業上の取引 ・広告事業及び海外事業における代理 販売 ③設備の賃貸 該当はありません
ADWAYS INNOVATIONS INDIA PVT. LTD.	インド グルガー オン	195,000 千INR	海外事業	100 (1)	①役員の兼任1名 ②営業上の取引 ・該当はありません ③設備の賃貸 該当はありません

- (注) 1. 上記以外に連結子会社が19社、非連結子会社が4社及び持分法適用関連会社が2社ありますが、事業に及ぼす影響度が僅少であり、かつ全体としても重要性がないため、記載を省略しております。
2. 議決権の所有割合の()内は、間接所有割合で内数であります。
3. ADWAYS KOREA, INC.、ADWAYS INNOVATIONS INDIA PVT. LTD. については、特定子会社に該当しております。

5 【従業員の状況】

(1) 連結会社の状況

2018年3月31日現在

セグメントの名称	従業員数（人）
広告事業	282（41）
アプリ・メディア事業	34（1）
海外事業	223（74）
本社部門（共通）	229（25）
その他	74（52）
合計	842（193）

- （注） 1. 従業員数は就業人員（当社グループからグループ外への出向者は除き、グループ外から当社グループへの出向者を含む。）であり、臨時雇用者数（アルバイト・人材派遣会社からの派遣社員を含む。）は、年間の平均人員を（ ）外数で記載しております。
2. 本社部門（共通）として、記載されている従業員数は、特定のセグメントに区分できない管理部門及びシステム部門に所属しているものであります。
3. 株式会社アドウェイズ・フロンティアにおいて、広告運用サポート業務に注力するために従業員を採用したこと等により「広告事業」の従業員数が増加しております。2017年新卒社員入社等により、「本社部門（共通）」の従業員数が増加しております。また、海外子会社の組織体制及び連携の見直しによる業務効率化等により「海外事業」の従業員数が減少しております。

(2) 提出会社の状況

2018年3月31日現在

従業員数（人）	平均年齢（歳）	平均勤続年数（年）	平均年間給与（千円）
509（69）	31歳8ヶ月	3年7ヶ月	5,515

セグメントの名称	従業員数（人）
広告事業	250（41）
アプリ・メディア事業	5（0）
海外事業	25（1）
本社部門（共通）	212（25）
その他	17（2）
合計	509（69）

- （注） 1. 従業員数は就業人員（当社から社外への出向者は除き、社外から当社への出向者を含む。）であり、臨時雇用者数（アルバイト・人材派遣会社からの派遣社員を含む。）は、年間の平均人員を（ ）外数で記載しております。
2. 本社部門（共通）として、記載されている従業員数は、特定のセグメントに区分できない管理部門及びシステム部門に所属しているものであります。

(3) 労働組合の状況

労働組合は結成されておきませんが、労使関係は円満に推移しております。

第2【事業の状況】

1【経営方針、経営環境及び対処すべき課題等】

(1) 経営方針

当社グループは、当社グループ全員の共通の価値観として「Beyond Everything Internet 〜インターネットの全てを越えていく〜」というビジョンを持ち、世界中の人々に「なにこれすげー こんなのはじめて」と言われることを目指し、本当の意味でそこで働く人々が成長できる場であること、このような当社グループ代表の使命を言葉にしたものが「人儲け」という経営理念であります。

当社グループは、何より人間中心の企業集団であります。当社グループは、人間的資質の向上を背景とした技術と頭脳の集団として、世界に通用するサービスの提供を行う独自のアイデンティティを持った企業グループとして成長し続けることを目指しております。

(2) 経営環境及び対処すべき課題等

当連結会計年度におけるインターネット広告市場は市場全体が引き続き拡大する一方、スマートフォンビジネスのサービスの多様化や新しいテクノロジーの発生が見られております。また全世界においては、インターネット及びスマートフォンの普及が今後さらに拡大していくと予想されます。

このような環境のもと、当社グループは、広告事業においては、スマートフォン向け広告サービスの取引拡大を目指すとともに、当社グループの主力広告主（クライアント）であるゲーム開発会社のみならず、それ以外の業種の広告主（クライアント）の獲得等による事業の拡大を図っております。また、アプリ・メディア事業においては、自社グループメディアにおける収益効率化を図り、ユーザーへのリーチの拡大を図っております。海外事業においては、アジア・インドを中心にスマートフォン向けサービスを充実させ、海外における広告主（クライアント）のニーズに答えていくことで当社グループの広告ネットワークの拡大を図ってまいります。

今後の収益拡大のためには、広告事業のさらなるサービス領域の拡大と既存商品の深耕、新規サービスによるサービスの総合力の底上げと品質の向上、海外における事業の拡大が重要な課題と認識しております。また、現在のビジネスの規模拡大を進めていくためには、当然の課題として、経営体制をより強固にしていくことも重要な課題と認識しております。

① 広告事業の拡大

従来の携帯電話端末向け広告の市場は縮小傾向にあるため、スマートフォン向け広告とPC向け広告の事業規模の拡大が必要不可欠であると認識しております。当社グループは、広告主（クライアント）と提携メディアのニーズを的確に把握し、両者をつなぐASPとしての地位を確固たるものへと築きつつ、他社との戦略的提携により広告ネットワークの拡充を行う等、事業規模の拡大を図ってまいります。そのためには、優秀な人材の確保や利便性が高いソフトウェアの開発等による差別化及び意思決定の迅速化を行うとともに、海外における広告事業の拡大を図ってまいります。

② 経営体制のさらなる強化

スマートフォンの普及は、ユーザーの携帯電話からインターネットの利用形態に大きな変化をもたらしており、そのプラットフォーム上で事業を行う企業は、従来のPC・携帯電話の垣根がない市場への対応を迫られております。また国際間でのプラットフォームの共有化は、海外企業の日本市場への参入を容易にしております。

当社グループは、今まで培ってきたPC・携帯電話双方の経験とスキルを生かし、比較的短期間でスマートフォンのビジネスを急拡大することができたと認識しております。また、国内の市場だけでなく成長著しいアジア市場や北米市場にいち早く進出し、各国で事業の足場を築きました。

今後は、世界に通用するようなサービスを提供し、有力な競合企業との差別化を行い、各拠点で安定した事業展開を進めていく段階だと認識しております。そのためには各国のニーズを的確に察知し、迅速な意思決定と統制のとれた体制を構築してまいります。

それらに対し最も効果的な対応を迅速に行えるよう、さらに強固な経営体制を構築してまいります。

2【事業等のリスク】

当連結会計年度末において、当社グループの事業展開上のリスク要因となる可能性があると考えられる主な事項を記載しております。それに加え、当社グループとして必ずしも特に重要なリスクとは考えていない事項についても、投資判断の上で、あるいは当社グループの事業活動を理解する上で重要と判断した事項について記載しております。

当社グループは、これらのリスクの発生可能性を考慮した上でのリスク回避、または問題が発生した場合の対応に努める方針であります。ただし、以下の記載は、当社グループにおける全てのリスクを網羅するものではありませんのでご注意ください。

なお、文中における将来に関する事項は、有価証券報告書提出日現在において、記載が適当であると当社が判断したものであります。

(1) 事業について

①業界動向について

インターネット広告市場は、これまで市場の拡大や利用者の増加、端末の普及、企業等の活動におけるインターネット利用の増加により成長を続けてまいりました。このような傾向は、今後も継続していくと考えておりますが、景気の変動等による業況感の悪化により、インターネット広告を含む広告出稿全般が低減する可能性があります。

②競合について

当社グループが属するインターネット広告業界は複数の競合会社で占められ、相互に競争関係にあります。当業界は特に大規模なシステム投資を必要とするものではないため、参入障壁は一般的に高くないとされ、また複数の競合他社と当社グループは料金体系等が同様の条件で事業運営をしておりますので、厳しい競争環境にあると判断しております。

特に、資金力が豊富な大手企業が、当社と同様のビジネスモデルを有する競合他社をM&Aにより傘下におさめ、その大手企業の同じく傘下にあるインターネットに関連するビジネスと連携させ、相乗効果を実現することにより、当社グループのビジネスに対して、多大な脅威を与える可能性があります。

当社グループとしては、今後もより広告主（クライアント）の利便性を重視した営業を推進し、競争優位の維持に尽力してまいりますが、将来、競合他社がより競争力の高い営業戦略を掲げて優位性を築いたり、新規参入者が新たなビジネスモデルを創造する等をした場合、当社グループの優位性が損なわれること等により、当社グループの業績に重要な影響を及ぼす可能性があります。

③当社営業活動における代理店への依存について

当社グループの営業活動は、主に営業員が直接広告主（クライアント）へ働きかけ広告主（クライアント）を獲得しておりますが、当社における代理店の活用による広告主（クライアント）の獲得が約21%を占めております。

当社グループが代理店を活用して広告主（クライアント）を獲得する行為は、当社グループの営業戦略が代理店を通じて広告主（クライアント）に届くという仕組みにおいて、広告主（クライアント）に直接働きかける機会が相対的に少なくなることにより、当社グループが掲げる営業戦略が浸透するスピードが比較的遅くなること、かつ、これを徹底することが困難となることが考えられ、サービスに対する広告主（クライアント）の要望が充分に反映しにくくなる可能性が考えられます。また、代理店に依存する比率が高まれば、代理店の圧力が強くなり、当社グループの営業戦略を容易に変更しにくくなることも考えられます。

今後、当社グループは代理店に過度に依存することなく広告主（クライアント）を獲得してまいりますが、事業環境の動向によっては、代理店への依存度が更に高まり、当社グループの業績に重要な影響を及ぼす可能性があります。

④新しい広告手法が出現することについて

当社グループが主に提供するアフィリエイト広告サービスは、純広告等の広告手法と比較して、客観的に効果を明確に把握しやすく費用対効果が高い、画期的な広告手法として広告主（クライアント）の理解が得られやすいことから、インターネット広告の中でも成長を遂げております。

しかしながら、アフィリエイト広告サービス以上に、客観的に効果を明確に把握しやすく費用対効果が高い、広告手法が開発された場合、その変化に対応するための技術開発に多大な費用が生じ、当社グループの収益を圧迫し、業績に重要な影響を及ぼす可能性があります。また、新しい広告手法の出現により、技術の変化への対応が遅れた場合、または、当社グループのサービスもしくは使用している技術等が陳腐化した場合に、業績に重要な影響を及ぼす可能性があります。

⑤法的規制等について

当社グループの取り組む国内外の事業に関連して、現在のところ、ビジネス継続に著しく重要な影響を与える法規制はありません。しかしながら、今後の法整備や法律に基づく広告手法の規制等の結果により、当社グループの取り組む事業のうち、スマートフォンアプリ等の開発・販売に関する事業において、例えばApple Inc. の運営するAppStoreやGoogle Inc. の運営するGoogle Playといったプラットフォーム等において課金方法や広告手法の一部が何らかの規制を受けた場合、当社グループの事業展開に重要な影響を及ぼす可能性があります。

⑥M&Aについて

当社グループは、国内外における業務拡大を目指しておりますが、その中でM&Aを有効な手段のひとつとして位置付けており、今後必要に応じてM&Aを実施する方針です。M&Aに際しては、対象企業のビジネス、財務内容及び法務等について詳細なデューデリジェンスを行い、各種リスクの低減を図る方針であります。デューデリジェンスの段階で確認又は想定されなかった事象がM&A実行後に発生又は判明する場合や、M&A実施後の事業展開が計画通りに進まない可能性があります。その場合は当社グループが当初想定した業績への寄与が得られない可能性があることに加え、対象企業の投資価値の減損処理が必要になることも考えられ、当社グループの業績等に影響を及ぼす可能性があります。

⑦個人情報保護について

当社グループが事業展開する中で、「個人情報の保護に関する法律」（個人情報保護法）の遵守は、事業展開上、重要な経営課題と位置付けて取り組んでおります。例えば、当社グループは個人でサイトを運営するメディアと契約、取引しておりますが、その過程で当社グループはサイト運営者の個人情報を入手しております。このように当社グループは上記の個人情報に限らず、様々な個人情報に接する機会があり、その管理に万全を期すため、関連する社内規程を整備の上、役員、従業員への啓蒙、教育活動の実施等に取り組む等、その保護、管理には細心の注意を払っております。しかし、不測の事態によって、個人情報の外部漏洩が発生した場合には、当社グループとして責任を問われる可能性もあり、信用低下や損害賠償請求等により、業績に影響を及ぼす可能性があります。

⑧システムトラブル等の問題について

当社グループは、インターネットを通じた広告配信及び成果発生実績の集計管理をシステムを通じて提供しております。そのため、これらのシステムに障害が発生し機能不全に陥った場合には、サービス提供が中断する等により、当社グループの事業に重大な影響が生じるおそれがあります。

また、システム上の仕組みの間隙やシステム障害によるセキュリティホール等を通じて、不正な成果発生が生じることにより、当社グループの事業に重大な影響が生じるおそれがあります。

このようなシステム障害や不正な成果の発生は、当社グループが使用するハードウェア、ソフトウェアの不具合、人為的なミスやシステムへの悪意あるアクセスによるものの他、アクセス数の急激な増大、通信回線の障害、コンピュータウィルス、停電及び自然災害等によっても生じ得るものであります。

当社グループはインターネット上でのサービス提供を主業務としているため、これらシステムの安定稼働を業務運営上の重要課題と認識しており、かかる障害や不正の発生による混乱及び損害発生の軽減に努めております。

しかしながら、当社グループの何らかの不備、あるいは現段階では予測できない原因により、システム障害や不正が発生した場合に適切な対応の遅れ、または適切な対応がなされなかった場合には、信用低下や損害賠償請求等により、業績に影響を及ぼす可能性があります。

⑨事業環境の変化へ対応するための投資について

当社グループでは、顧客のニーズに対応したシステムの作り込みや、当社グループで利用する業務管理用のシステムの開発投資を行っております。当社グループの事業環境が想定以上に激変し、開発投資対象となっている課題が世の中の動きから大きく乖離する場合、開発投資を回収できなくなり、業績に重要な影響を及ぼす可能性があります。

⑩海外子会社におけるカントリーリスクについて

当社グループの海外子会社について、中国、香港、台湾、韓国、シンガポール、インド、フィリピン、ベトナムのアジアの国と地域、並びに北米に子会社があり、それらの国においてインターネットマーケティング事業及びスマートフォンアプリ開発事業等を展開しております。海外事業の展開が加速するのに伴い、海外子会社や海外拠点の所在地によって、その国情や今後の法令改正、及び新たな法令の制定、あるいは取引慣行や諸規制等によって、業績に重要な影響を及ぼす可能性があります。

(2) 組織体制について

①特定人物への依存について

当社グループの事業の推進者は、当社代表取締役である岡村陽久であります。岡村陽久は、当社設立以来の当社の最高経営責任者であり、経営方針や戦略の決定をはじめ、営業を中心とする各方面の事業推進において重要な役割を果たしております。

このため、当社グループでは最高経営責任者に過度に依存しない経営体制を構築すべく、取締役会の監督機能を高めるため、法律や会計の専門家の役員就任や、執行役員制の導入など組織整備を推進しておりますが、現時点で何らかの理由により、岡村陽久の業務遂行が困難となった場合、事業推進及び業績その他に影響を及ぼす可能性があります。なお、岡村陽久は、当連結会計年度末現在において発行済株式総数（自己株式を除く）の21.03%の株式を所有しております。

②有能な人材の確保や育成について

当社グループでは、急激な事業拡大に伴って優秀な人材の確保とその育成は重要な課題となっており、内部での人材育成と抜擢及び外部からの人材登用に努めております。しかしながら、当社グループの属する市場が今後拡大し、競争が激化すれば、競合他社との人材獲得競争も激化し、当社グループの人材が外部に流出することや、人材確保に影響をきたす可能性もあります。かかる事態が生じた場合、当社グループの競争力に影響を及ぼす可能性があります。

③内部管理体制について

当社グループでは、企業価値の持続的な増大を図るためにコーポレート・ガバナンスが有効に機能することが不可欠であるとの認識のもと、業務の有効性及び効率性を確保し、財務報告の信頼性を高め、健全な倫理観に基づく法令遵守を徹底することを目的に、社長直轄の独立した組織としてコンプライアンス室を設置し、内部管理体制の充実に努めております。しかしながら、事業の急速な拡大により、十分な内部管理体制の構築が追いつかないという状況が生じる場合には、「財務報告に係る内部統制の評価」（日本版SOX法）への対応に支障が生じる可能性、または当社グループの事業及び業績に影響を及ぼす可能性があります。

(3) その他

①知的財産権について

当社グループが日常的な事業活動を行う過程において使用しているソフトウェア及びシステムは、第三者の知的財産を侵害するものではないものと認識しておりますが、不測の事態あるいは何らかの不備により、当社グループが所有するまたは使用許諾を得ているもの以外の知的財産権を侵害してしまう可能性があります。

②訴訟について

当社グループは、当連結会計年度末において開示すべき損害賠償を請求されている事実及び訴訟を提起されている事実はありません。しかしながら、システムダウンによりサービスが停止した場合、外部侵入等による個人情報情報の漏洩や知的財産権の侵害等の予期せぬトラブルが発生した場合や取引先との関係に何らかの問題が生じた場合、これらに起因する損害賠償を請求される、あるいは訴訟を提起される場合があります。また、損害賠償の金額、訴訟の内容及び結果によっては、財政状態及び業績並びに社会的信用に影響を及ぼす可能性があります。

③有価証券時価評価について

当社グループは、M&Aや資本・業務提携等により関係会社、取引先等の株式を保有しております。そのうち市場性のある株式については、株価が著しく下落した場合に減損処理を行う可能性があります。市場性のない株式については、当該株式の発行会社の財政状態が著しく悪化した場合に減損処理を行う可能性があります。これらような場合には、当社グループの業績等に影響を及ぼす可能性があります。

3【経営者による財政状態、経営成績及びキャッシュ・フローの状況の分析】

業績等の概要

(1) 業績

当連結会計年度（2017年4月1日～2018年3月31日）におけるわが国の経済は、2012年11月を底に緩やかな回復基調が続いており、戦後2番目の長さになった可能性があるとしており、堅調な雇用・所得情勢を背景に、消費も緩やかに回復していると言われております。

このような経済の下、当社グループが属するインターネット広告業界は、生活者のモバイルシフトが進み、モバイルでの運用型広告・動画広告が伸長した結果、2017年のインターネット広告市場は1兆5,094億円（前年比15.2%増）と引き続き2桁成長を続け、国内広告市場全体の前年比率が1.6%増で推移する中で順調に拡大しております。（参考：株式会社電通「2017年（平成29年）日本の広告費」）

当連結会計年度（2017年4月1日～2018年3月31日）における当社グループは、主力のインターネット広告事業におけるスマートフォン領域において、新たな広告プラットフォームであるUNICORNを2017年5月にリリースする等、事業の拡大に注力してまいりました。また、海外においては拠点体制の再構築及び事業の選択と集中を行い、9の国と地域（2018年3月末日時点）にてアプリマーケティング事業を中心に展開してまいりました。

この結果、当連結会計年度（2017年4月1日～2018年3月31日）の当社グループにおける連結業績は、前連結会計年度に対して、売上高及び営業利益は、一部のクライアントの出稿予算額縮小や運用メニューの表記是正によるプロモーション獲得数の一時的な減少により減少いたしました。また、経常利益及び親会社株主に帰属する当期純利益は増加いたしました。

[連結業績]

(単位：千円、端数切捨て)

	前連結会計年度 (2017年3月期)	当連結会計年度 (2018年3月期)	増減額 (増減率)
売上高	42,329,478	41,501,338	△828,139 (△2.0%)
営業利益	315,693	299,346	△16,346 (△5.2%)
経常利益	248,208	575,959	327,751 (132.0%)
親会社株主に帰属する当期純利益又は 親会社株主に帰属する当期純損失(△)	△450,825	9,977	460,803 (—)

			前連結会計年度 (2017年3月期)	当連結会計年度 (2018年3月期)	増減額 (増減率)
外部 売上高	①広告 事業	スマートフォン 向け広告	17,401,823	17,486,198	84,375 (0.5%)
		P C 向け広告	18,288,810	17,197,900	△1,090,910 (△6.0%)
		合計	35,690,633	34,684,098	△1,006,534 (△2.8%)
	②アプリ・ メディア 事業	アプリ事業	338,090	221,037	△117,052 (△34.6%)
		メディア事業	359,008	465,606	106,597 (29.7%)
		合計	697,098	686,643	△10,454 (△1.5%)
	③海外事業		5,860,636	6,117,460	256,824 (4.4%)
	④その他		81,109	13,134	△67,974 (△83.8%)
セグメント利益 又は セグメント損失 (△)	①広告事業		2,975,448	2,202,461	△772,986 (△26.0%)
	②アプリ・メディア事業		△74,301	△191,840	△117,538 (—)
	③海外事業		△830,325	△130,605	699,719 (—)
	④その他		△273,802	△237,061	36,740 (—)

①広告事業

広告事業は、スマートフォンアプリ向け広告サービス「Smart-C」、並びにP C 向けアフィリエイト広告サービス「JANet」を中心に、インターネット上で事業展開を行う企業に対して、インターネット広告を総合的に提供しております。

当連結会計年度における広告事業のスマートフォン向け広告は、ゲーム、マンガ及び女性向けアプリ等の広告出稿が増加したこと等により、売上高は17,486,198千円（前年同期比0.5%増）となりました。

当連結会計年度における広告事業のP C 向け広告は、第3四半期において、一部のクライアントの出稿予算額縮小やプロモーション獲得数が一時的に減少したこと等により、売上高は17,197,900千円（前年同期比6.0%減）となりました。

この結果、広告事業の売上高は34,684,098千円（前年同期比2.8%減）、セグメント利益は2,202,461千円（前年同期比26.0%減）となりました。

なお、スマートフォン向け広告は主にアプリ向け広告の売上高で、スマートフォンブラウザを介したweb広告の売上高はスマートフォン向け広告ではなく、P C 向け広告に含まれております。

また、前期までスマートフォン向け広告とフィーチャーフォン向け広告を合算して「モバイル向け広告」としていましたが、フィーチャーフォン向け広告の売上高が僅少なため、第1四半期連結累計期間より「モバイル向け広告」を「スマートフォン向け広告」と表記しております。

②アプリ・メディア事業

アプリ・メディア事業は、主に連結子会社であるADWAYS TECHNOLOGY LTD. において、スマートフォンアプリの開発・運営を行うアプリ事業と、連結子会社である株式会社サムライ・アドウェイズにおいて土業向けのポータルサイト等のメディア運営等を行っているメディア事業を展開しております。

当連結会計年度におけるアプリ事業は、「古の女神と宝石の射手」等の自社グループタイトルのゲームアプリの売上高が減少したことにより、売上高は221,037千円（前年同期比34.6%減）となりました。

また、メディア事業では、株式会社サムライ・アドウェイズにおいて新規顧客開拓を積極的に行ったこと等により、売上高は465,606千円（前年同期比29.7%増）となりました。

この結果、アプリ・メディア事業の売上高は686,643千円（前年同期比1.5%減）、セグメント損失は191,840千円（前年同期は74,301千円の損失）となりました。

③海外事業

海外事業は、中国・香港・台湾・韓国・米国・シンガポール・インドにおいて、現地企業と各国における外国企業を対象として、インターネットマーケティングの総合支援サービスを提供しております。

また、主に前述の地域を主たるマーケットとして想定しているプロダクトの開発や運営、並びにサービス提供が含まれます。

当連結会計年度における海外事業は、中国におけるスマートフォン向け広告事業の伸張、及び各国の連結子会社において事業体制の効率化に努めたことにより、売上高6,117,460千円（前年同期比4.4%増）、セグメント損失は130,605千円（前年同期は830,325千円の損失）となりました。

④その他

その他は、日本及び海外における新規事業等により構成されております。

当連結会計年度におけるその他は、前連結会計年度においてインターネットを活用した中古品買取販売事業を営んでいた連結子会社の売却により、売上高は13,134千円（前年同期比83.8%減）、セグメント損失は237,061千円（前年同期は273,802千円の損失）となりました。

(2) キャッシュ・フロー

（単位：千円、端数切捨て）

	前連結会計年度 (2017年3月期)	当連結会計年度 (2018年3月期)	増減額
営業活動によるキャッシュ・フロー	△53,650	1,095,023	1,148,674
投資活動によるキャッシュ・フロー	△987,083	188,958	1,176,041
財務活動によるキャッシュ・フロー	△1,164,231	△156,710	1,007,521
現金及び現金同等物に係る換算差額	△112,977	46,670	159,647
現金及び現金同等物の増減額	△2,317,942	1,173,942	3,491,884
現金及び現金同等物の期首残高	10,635,272	8,317,330	△2,317,942
現金及び現金同等物の期末残高	8,317,330	9,491,272	1,173,942

当連結会計年度末における現金及び現金同等物（以下、「資金」という。）は、前連結会計年度末に対して、1,173,942千円増加し、9,491,272千円となりました。当社グループにおけるキャッシュ・フローの状況は以下の通りであります。

[営業活動によるキャッシュ・フロー]

- ・営業活動によるキャッシュ・フローは、1,095,023千円の収入となりました（前期は53,650千円の支出）。主な収入要因は、税金等調整前当期純利益202,801千円、減価償却費142,305千円、貸倒引当金の増加102,605千円、売上債権の減少877,789千円であり、主な支出の要因は、未払消費税の減少253,293千円、仕入債務の減少105,587千円によるものであります。

[投資活動によるキャッシュ・フロー]

- ・投資活動によるキャッシュ・フローは、188,958千円の収入となりました（前期は987,083千円の支出）。主な収入要因は、定期預金の払戻による収入536,320千円、投資事業組合からの分配による収入257,044千円であり、主な支出要因は、投資有価証券の取得による支出261,466千円、無形固定資産の取得による支出162,027千円、有形固定資産の取得による支出138,708千円、関係会社株式の取得による支出120,000千円によるものであります。

[財務活動によるキャッシュ・フロー]

- ・財務活動によるキャッシュ・フローは、156,710千円の支出となりました（前期は1,164,231千円の支出）。主な要因は、連結の範囲の変更を伴わない子会社株式の取得による支出61,984千円、配当金の支払による支出90,381千円によるものであります。

生産、受注及び販売の実績

(1) 生産実績

当社グループは、生産活動により製品を製造販売する製造業には属しておりませんので、生産実績を記載しておりません。

(2) 受注実績

当連結会計年度におきましては、受注取引はありません。

(3) 販売実績

[報告セグメント別販売実績]

(単位：千円、端数切捨て)

セグメントの名称	当連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	前年同期比 (%)
広告事業	34,684,098	△2.8
アプリ・メディア事業	686,643	△1.5
海外事業	6,117,460	4.4
報告セグメント 計	41,488,203	△1.8
その他	13,134	△83.8
合計	41,501,338	△2.0

(注) 1. 上記金額は、連結会社間の取引高を消去しております。

2. 当連結会計年度の総販売実績の100分の10を超える販売先はありません。

3. 本表の金額には、消費税等は含まれておりません。

財政状態、経営成績及びキャッシュ・フローの状況の分析

(1) 重要な会計方針及び見積り

当社グループの連結財務諸表は、我が国において一般に公正妥当と認められている会計基準に基づき作成しております。この連結財務諸表の作成に当たりまして、必要と思われる見積りは、合理的な基準に基づいて実施しております。

詳細につきましては、「第5 経理の状況 1 連結財務諸表等 (1) 連結財務諸表 連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項」に記載のとおりであります。

(2) 財政状態の分析

①資産、負債及び純資産の状況

(単位：千円、端数切捨て)

	前連結会計年度 (2017年3月期)	当連結会計年度 (2018年3月期)	増減額 (増減率)
資産合計	18,316,780	17,921,916	△394,864 (△2.2%)
負債合計	7,265,250	6,899,012	△366,238 (△5.0%)
純資産合計	11,051,530	11,022,904	△28,626 (△0.3%)

[資産合計]

- ・流動資産は、前連結会計年度末より233,596千円減少し15,215,693千円となりました。主な要因は、現金及び預金が637,622千円増加したものの、受取手形及び売掛金が816,914千円減少したこと、及び貸倒引当金が64,882千円増加したことによるものであります。
- ・固定資産は、前連結会計年度末より161,267千円減少し2,706,222千円となりました。主な要因は、無形固定資産に含まれるのれんが94,409千円減少したこと、及び投資その他の資産に含まれる貸倒引当金が51,147千円増加したことによるものであります。

〔負債合計〕

- ・流動負債は、前連結会計年度末より412,835千円減少し6,731,420千円となりました。主な要因は、支払手形及び買掛金が79,468千円減少したこと、及びその他に含まれる未払消費税が251,968千円減少したことによるものであります。
- ・固定負債は、前連結会計年度末より46,597千円増加し167,591千円となりました。主な要因は、繰延税金負債が34,049千円増加したことによるものであります。

〔純資産合計〕

- ・前連結会計年度末より28,626千円減少し11,022,904千円となりました。主な要因は為替換算調整勘定が43,511千円増加したものの、利益剰余金が81,372千円減少したことによるものであります。

(3) 経営成績の分析

①売上高

広告事業では、一部の広告主（クライアント）の出稿予算額縮小や運用メニューの表記是正によるプロモーション獲得数の一時的な減少により、前連結会計年度より828,139千円減少し、41,501,338千円（前期比2.0%減）となりました。

②売上原価、売上総利益

売上原価は、売上高の減少により掲載料等が減少したため、前連結会計年度より666,167千円減少し、34,327,898千円（前期比1.9%減）となりました。その結果、売上総利益は、前連結会計年度より161,972千円減少し、7,173,440千円（前期比2.2%減）となりました。

③販売費及び一般管理費

販売費及び一般管理費は、海外拠点の営業体制整備により人件費、外注費を抑制し、前連結会計年度より145,625千円減少し、6,874,093千円（前期比2.1%減）となりました。

④営業利益

営業利益は、売上高の減少により前連結会計年度より16,346千円減少し、299,346千円（前期比5.2%減）となりました。

⑤経常利益

経常利益は、投資有価証券評価益の増加により前連結会計年度より327,751千円増加し、575,959千円（前期比132.0%増）となりました。

⑥税金等調整前当期純損益

税金等調整前当期純損益は、前連結会計年度より395,515千円増加し、202,801千円の利益（前連結会計年度は192,713千円の損失）となりました。

⑦親会社株主に帰属する当期純損益

親会社株主に帰属する当期純損益は、前連結会計年度より460,803千円増加し、9,977千円の利益（前連結会計年度は450,825千円の損失）となりました。

(4) キャッシュ・フローの分析

キャッシュ・フローの分析については、「第2 事業の状況 3 経営者による財政状態、経営成績及びキャッシュ・フローの状況の分析 (2) キャッシュ・フロー」の項目をご参照ください。

4 【経営上の重要な契約等】

当連結会計年度において、経営上の重要な契約等の決定又は締結等はありません。

5 【研究開発活動】

当社グループは、広告事業において、世界中でスマートフォン広告の効果測定を可能にするトラッキングシステムの開発や、アフィリエイト広告等において広告主（クライアント）と提携Webサイトの連携するためのシステムのバージョンアップ、他の広告サービスのシステムと連携するためのシステム開発、EC支援システムの開発等の研究開発活動を実施しております。

当連結会計年度における研究開発費は、71,982千円であり、広告の運用を効率化するツールやプロダクツの開発、また今後拡大が見込まれるスマートフォン市場に向けた新技術や新サービスの研究を行ったことによるものです。

第3【設備の状況】

1【設備投資等の概要】

当社グループでは、急速な技術革新や他社との競争の激化に的確に対応するため、必要な設備投資をスピーディーに実施しております。

当連結会計年度においては、在外子会社の移転に伴う新オフィスの設備、器具備品等の購入を中心に無形固定資産を含め総額321,291千円の設備投資を実施しております。

なお、セグメント別の内訳は、広告事業124,007千円、アプリ・メディア事業16,180千円、海外事業71,699千円、その他24,802千円、全社資産84,601千円であります。

2【主要な設備の状況】

当社グループにおける主要な設備は、以下のとおりであります。

(1) 提出会社

2018年3月31日現在

事業所名 (所在地)	セグメントの名称	設備の内容	帳簿価額					従業員数 (人)
			建物 (千円)	工具、器具 及び備品 (千円)	商標権 (千円)	ソフトウェア (千円)	合計 (千円)	
本社 (東京都新宿区)	広告事業	広告設備	60,929	33,013	529	189,086	283,558	250 [25]
本社 (東京都新宿区)	アプリ・メディア 事業	基幹設備	1,558	819	—	897	3,275	5 [0]
本社 (東京都新宿区)	海外事業	基幹設備	7,014	3,686	—	4,037	14,738	25 [1]
本社 (東京都新宿区)	その他	基幹設備	4,057	2,628	—	2,503	9,189	17 [2]
本社 (東京都新宿区)	全社	管理用設備	46,602	24,494	—	26,822	97,919	212 [26]
合計			120,162	64,642	529	223,346	408,680	509 [54]

- (注) 1. 従業員は就業人員であり、[] 内に臨時雇用者（派遣社員、アルバイト）の期末人員数を外数で記載しております。
2. 建物の一部を賃借しております。年間賃借料は312,734千円であります。
3. ソフトウェアの帳簿価額にはソフトウェア仮勘定94,078千円が含まれております。

(2) 国内子会社

主要な設備はありません。

(3) 在外子会社

2017年12月31日現在

会社名	事業所名 (所在地)	セグメントの名称	設備の内容	帳簿価額				従業員数 (人)
				建物 (千円)	工具、器具 及び備品 (千円)	ソフトウェア (千円)	合計 (千円)	
愛徳威軟件開発 (上海) 有限公司	本社 (上海)	アプリ・メディア 事業	内装・事務用 機器	812	731	606	2,149	2 [0]
愛徳威軟件開発 (上海) 有限公司	本社 (上海)	海外事業	内装・事務用 機器	4,381	3,942	3,267	11,590	2 [0]
愛徳威軟件開発 (上海) 有限公司	本社 (上海)	その他	内装・事務用 機器	547	492	408	1,448	32 [46]
愛徳威広告 (上海) 有限公司	本社 (上海)	海外事業	内装・事務用 機器	4,435	4,851	—	9,287	77 [14]
合計				10,177	10,017	4,281	24,476	113 [60]

- (注) 従業員は就業人員であり、[] 内に臨時雇用者（派遣社員、アルバイト）の期末人員数を外数で記載しております。

3 【設備の新設、除却等の計画】

(1) 重要な設備の新設

該当事項はありません。

(2) 重要な設備の改修

該当事項はありません。

(3) 重要な設備の売却

該当事項はありません。

第4 【提出会社の状況】

1 【株式等の状況】

(1) 【株式の総数等】

① 【株式の総数】

種類	発行可能株式総数（株）
普通株式	153,150,000
計	153,150,000

② 【発行済株式】

種類	事業年度末現在発行数（株） （2018年3月31日）	提出日現在発行数（株） （2018年6月28日）	上場金融商品取引所名 又は登録認可金融商品 取引業協会名	内容
普通株式	41,588,500	41,588,500	東京証券取引所 （マザーズ）	単元株式数 100株
計	41,588,500	41,588,500	—	—

（注）「提出日現在発行数」欄には、2018年6月1日からこの有価証券報告書提出日までの新株予約権の行使により発行された株式数は含まれておりません。

(2) 【新株予約権等の状況】

① 【ストックオプション制度の内容】

会社法に基づき、発行した新株予約権は次のとおりであります。

決議年月日	2013年1月31日
付与対象者の区分及び人数（名）	取締役 2 監査役 3
新株予約権の数（個）※	78
新株予約権の目的となる株式の種類、内容及び数（株）※	普通株式 39,000
新株予約権の行使時の払込金額（円）※	98,000 1株当たり196（注）2. 7
新株予約権の行使期間 ※	自 2015年2月19日 至 2023年1月31日
新株予約権の行使により株式を発行する場合の株式の発行価格及び資本組入額（円）※	発行価格 325 資本組入額 163（注）3. 7
新株予約権の行使の条件 ※	（注）4
新株予約権の譲渡に関する事項 ※	（注）5
組織再編成行為に伴う新株予約権の交付に関する事項 ※	（注）6

※当事業年度の末日（2018年3月31日）における内容を記載しております。提出日の前月末現在（2018年5月31日）において、記載すべき内容が当事業年度の末日における内容から変更がないため、提出日の前月末現在に係る記載を省略しております。

(注) 1. 新株予約権の目的となる株式の数に関する事項は次のとおりであります。

(1) 新株予約権の目的である株式

当社普通株式39,000株

下記注1. (2)により本新株予約権にかかる付与株式数が調整された場合は、調整後付与株式数に本新株予約権の数を乗じた数とする。

(2) 新株予約権1個あたりの目的である株式の数

本新株予約権1個あたりの目的である株式の数(以下、「付与株式数」という。)は、当社普通株式1株とする。

なお、本新株予約権の割当日後、当社が株式分割(当社普通株式の無償割当てを含む。以下、株式分割の記載につき同じ。)又は株式併合を行う場合、次の算式により調整し、調整による1株未満の端数については、これを切り捨てる。

調整後付与株式数 = 調整前付与株式数 × 分割・併合の比率

また、上記のほか、本新株予約権の割当日後、付与株式数の調整を必要とするやむを得ない事由が生じた場合、合理的な範囲で、付与株式数を調整する。

2. 新株予約権の行使時の払込金額に関する事項は次のとおりであります。

新株予約権の行使に際して出資される財産の価額は、次により決定される1株当たりの払込金額(以下、「行使価額」という。)に、付与株式数を乗じた金額とする。

行使価額は、金98,000円とする。

新株予約権発行日以降、以下の事由が生じた場合は、行使価額を調整する。

(1) 当社が当社普通株式につき株式分割又は株式併合を行う場合、次の算式により行使価額を調整し、調整による1円未満の端数は切り上げる。

$$\text{調整後行使価額} = \text{調整前行使価額} \times \frac{1}{\text{分割・併合の比率}}$$

(2) 当社が時価を下回る価額で、当社普通株式につき新株式の発行又は自己株式の処分を行う場合(当社普通株式の交付を請求できる新株予約権の行使による場合を除く。)、次の算式により行使価額を調整し、調整による1円未満の端数は切り上げる。

$$\text{調整後行使価額} = \text{調整前行使価額} \times \frac{\text{既発行株式数} + \frac{\text{新規発行株式数} \times 1 \text{株当たり払込金額}}{\text{新規発行前の時価}}}{\text{既発行株式数} + \text{新規発行株式数}}$$

上記算式において「既発行株式数」とは、当社の発行済株式総数から当社が保有する普通株式に係る自己株式数を控除した数とし、自己株式の処分を行う場合には、「新規発行株式数」を「処分する自己株式数」に読み替えるものとする。

(3) 上記(1)及び(2)のほか、行使価額の調整を必要とするやむを得ない事由が生じた場合、合理的な範囲で行使価額の調整をする。

3. 新株予約権の行使により株式を発行する場合の株式の発行価格及び資本組入額に関する事項は次のとおりであります。

(1) 新株予約権の行使により株式を発行する場合における増加する資本金の額は、会社計算規則第17条第1項に従い算出される資本金等増加限度額の2分の1の金額とし、計算の結果生じる1円未満の端数は切り上げる。

(2) 新株予約権の行使により株式を発行する場合における増加する資本準備金の額は、上記注3. (1)記載の資本金等増加限度額から上記注3. (1)に定める増加する資本金の額を減じた額とする。

4. 新株予約権の行使の条件に関する事項は次のとおりであります。

(1) 新株予約権者は、権利行使時においても、当社、当社子会社又は当社の関連会社の取締役、監査役又は従業員のいずれかの地位を有することを要する。ただし、新株予約権者の退任又は退職後の権利行使につき正当な理由があると取締役会が認めた場合は、この限りではない。

(2) 新株予約権者が死亡した場合、新株予約権者の相続人による本新株予約権の行使は認めない。ただし、取締役会が特に認めた場合は、この限りではない。

(3) 本新株予約権の行使によって、当社の発行済株式総数が当該時点における授權株式数を超過することとなるときは、当該本新株予約権の行使を行うことはできない。

(4) 新株予約権者は、その割当数の一部又は全部を行使することができる。ただし、1個未満の行使はできないものとする。

- (5) 新株予約権者が当社、当社の子会社又は当社の関連会社の取締役、監査役又は従業員のいずれの地位も有しなくなった場合、当社は、取締役会で当該新株予約権の権利行使を認めることがない旨の決議をすることができる。この場合においては、当該新株予約権は会社法第287条の定めに基づき消滅するものとする。

5. 譲渡による本新株予約権の取得については、取締役会の承認を要する。6. 組織再編成行為に伴う新株予約権の交付に関する事項は次のとおりであります。

当社が、合併（当社が合併により消滅する場合に限る。）、吸収分割、新設分割、株式交換又は株式移転（以上を総称して、以下「組織再編行為」という。）をする場合において、組織再編行為の効力発生時点において残存する新株予約権（以下「残存新株予約権」という。）の新株予約権者に対し、それぞれの場合につき、会社法第236条第1項第8号イからホまでに掲げる株式会社（以下「再編対象会社」という。）の新株予約権をそれぞれ交付することとする。この場合においては、残存新株予約権は消滅し、再編対象会社は新株予約権を交付する旨及びその比率を、吸収合併契約、新設合併契約、吸収分割契約、新設分割計画、株式交換契約又は株式移転計画において定めた場合に限るものとする。

(1) 交付する再編対象会社の新株予約権の数

新株予約権者が保有する新株予約権の数と同一の数をそれぞれ交付する。

(2) 新株予約権の目的である再編対象会社の株式の種類

再編対象会社の普通株式とする。

(3) 新株予約権の目的である再編対象会社の株式の数

組織再編行為の条件を勘案のうえ、上記2. (1) に準じて決定する。

(4) 新株予約権の行使に際して出資される財産の価額

交付される各新株予約権の行使に際して出資される財産の価額は、組織再編行為の条件等を勘案のうえ、上記2. で定められる行使価額を調整して得られる再編後行使価額に、上記6. (3) に従って決定される当該新株予約権の目的である再編対象会社の株式の数を乗じた額とする。

(5) 新株予約権を行使することができる期間

上記新株予約権の行使期間に定める行使期間の初日と組織再編行為の効力発生日のうち、いずれか遅い日から上記新株予約権の行使期間に定める行使期間の末日までとする。

(6) 新株予約権の行使により株式を発行する場合における増加する資本金及び資本準備金に関する事項

上記3. に準じて決定する。

(7) 譲渡による新株予約権の取得の制限

譲渡による取得の制限については、再編対象会社の取締役会の決議による承認を要するものとする。

(8) その他新株予約権の行使の条件

上記4. に準じて決定する。

(9) その他の条件については、再編対象会社の条件に準じて決定する。

7. 2013年10月1日付で行った1株を500株とする株式分割により、「新株予約権の目的となる株式数」「新株予約権の行使時の払込金額」及び「新株予約権の行使により株式を発行する場合の株式の発行価格及び資本組入額」は調整されております。

②【ライツプランの内容】

該当事項はありません。

③【その他の新株予約権等の状況】

該当事項はありません。

(3)【行使価額修正条項付新株予約権付社債券等の行使状況等】

該当事項はありません。

(4) 【発行済株式総数、資本金等の推移】

年月日	発行済株式総 数増減数 (株)	発行済株式総 数残高 (株)	資本金増減額 (千円)	資本金残高 (千円)	資本準備金増 減額 (千円)	資本準備金残 高 (千円)
2013年4月1日～ 2013年9月30日 (注) 1	1,130	81,100	8,526	1,487,668	8,526	477,668
2013年10月1日 (注) 2	40,468,900	40,550,000	—	1,487,668	—	477,668
2013年10月1日～ 2014年3月31日 (注) 3	172,500	40,722,500	2,242	1,489,910	2,242	479,910
2014年4月1日～ 2015年3月31日 (注) 4	846,000	41,568,500	113,258	1,603,169	113,258	593,169
2015年4月1日～ 2016年3月31日 (注) 5	15,000	41,583,500	2,089	1,605,258	2,089	595,258
2017年4月1日～ 2018年3月31日 (注) 6	5,000	41,588,500	696	1,605,955	696	595,955

- (注) 1. 2013年4月1日から2013年9月30日までの間の新株予約権の権利行使による増加であります。
2. 普通株式1株につき普通株式500株の割合で株式分割を行ったことによる増加であります。
3. 2013年10月1日から2014年3月31日までの間の新株予約権の権利行使による増加であります。
4. 2014年4月1日から2015年3月31日までの間の新株予約権の権利行使による増加であります。
5. 2015年4月1日から2016年3月31日までの間の新株予約権の権利行使による増加であります。
6. 2017年4月1日から2018年3月31日までの間の新株予約権の権利行使による増加であります。

(5) 【所有者別状況】

2018年3月31日現在

区分	株式の状況（１単元の株式数100株）								単元未満株式の状況（株）
	政府及び地方公共団体	金融機関	金融商品取引業者	その他の法人	外国法人等		個人その他	計	
					個人以外	個人			
株主数（人）	—	5	37	115	34	68	25,612	25,871	—
所有株式数（単元）	—	14,024	17,779	42,751	11,576	546	329,147	415,823	6,200
所有株式数の割合（％）	—	3.37	4.28	10.28	2.78	0.13	79.16	100.000	—

(注) 自己株式2,837,800株は、「個人その他」に28,378単元含まれております。

(6) 【大株主の状況】

2018年3月31日現在

氏名又は名称	住所	所有株式数 (株)	発行済株式（自己株式を除く。）の 総数に対する所有 株式数の割合 (%)
岡村 陽久	東京都台東区	8,149,300	21.03
伊藤忠商事株式会社	東京都港区北青山2丁目5番1号	4,000,600	10.32
日本トラスティ・サービス信託銀行 株式会社（信託口）	東京都中央区晴海1丁目8番11号	1,198,300	3.09
松井証券株式会社	東京都千代田区麹町1丁目4番地	283,800	0.73
株式会社SBI証券	東京都港区六本木1丁目6番1号	238,400	0.62
BNY GCM CLIENT ACCOUNT JPRD AC I SG (FE-AC) (常任代理人 株式会社三菱東京UFJ銀行)	PETERBOROUGH COURT 133 FLEET STREET LO NDON EC4A 2BB UNIT ED KINGDOM (東京都千代田区丸の内2丁目7番1号)	218,343	0.56
BNYM SA/NV FOR B NYM FOR BNY GCM CLIENT ACCOUNTS M LSCB RD (常任代理人 株式会社三菱東京UFJ銀行)	1 CHURCH PLACE, LO NDON, E14 5HP UK (東京都千代田区丸の内2丁目7番1号)	216,700	0.56
大和証券株式会社	東京都千代田区丸の内1丁目9番1号	194,300	0.50
日本証券金融株式会社	東京都中央区日本橋茅場町1丁目2番10号	183,300	0.47
カブドットコム証券株式会社	東京都千代田区大手町1丁目3番2号 経団連会館6階	181,700	0.47
計	—	14,864,743	38.35

(注) 1. 上記のほか、自己株式が2,837,800株あります。

(注) 2. 株式会社三菱東京UFJ銀行は、2018年4月1日付けで株式会社三菱UFJ銀行に商号を変更しております。

(7) 【議決権の状況】

① 【発行済株式】

2018年3月31日現在

区分	株式数（株）	議決権の数（個）	内容
無議決権株式	—	—	—
議決権制限株式（自己株式等）	—	—	—
議決権制限株式（その他）	—	—	—
完全議決権株式（自己株式等）	（自己保有株式） 普通株式 2,837,800	—	—
完全議決権株式（その他）	普通株式 38,744,500	387,445	—
単元未満株式	普通株式 6,200	—	—
発行済株式総数	41,588,500	—	—
総株主の議決権	—	387,445	—

② 【自己株式等】

2018年3月31日現在

所有者の氏名又は名称	所有者の住所	自己名義所有者 株式数（株）	他人名義所有 株式数（株）	所有株式数の 合計（株）	発行済株式総数に 対する所有株式数 の割合（％）
株式会社アドウェイズ	東京都新宿区西新宿 八丁目17番1号	2,837,800	—	2,837,800	6.82
計	—	2,837,800	—	2,837,800	6.82

2 【自己株式の取得等の状況】

【株式の種類等】 会社法第155条第7号に該当する普通株式の取得

(1) 【株主総会決議による取得の状況】

該当事項はありません。

(2) 【取締役会決議による取得の状況】

該当事項はありません。

(3) 【株主総会決議又は取締役会決議に基づかないものの内容】

区分	株式数（株）	価額の総額（円）
当事業年度における取得自己株式	100	47,446
当期間における取得自己株式	—	—

(注) 当期間における取得自己株式には、2018年6月1日からこの有価証券報告書提出日までの単元未満株式の買取りによる株式は含まれておりません。

(4) 【取得自己株式の処理状況及び保有状況】

区分	当事業年度		当期間	
	株式数（株）	処分価額の総額（円）	株式数（株）	処分価額の総額（円）
引き受ける者の募集を行った取得自己株式	—	—	—	—
消去処分を行った取得自己株式	—	—	—	—
合併、株式交換、会社分割に係る移転を行った取得自己株式	—	—	—	—
その他（一）	—	—	—	—
保有自己株式数	2,837,800	—	2,837,800	—

(注) 当期間における保有自己株式には、2018年6月1日からこの有価証券報告書提出日までの単元未満株式の買取り及び売渡による株式は含まれておりません。

3【配当政策】

当社グループは、中長期的な企業価値の向上に努め、株主に対する利益還元を行うことを経営の重要課題の一つとして認識しております。その基本方針として、財務体質の強化及び将来の事業展開に備えるための内部留保の充実を中心に据えながら、その業績並びに業績の見通しに応じた適切な利益還元を実施していく予定です。また、株主に対する利益還元や資本政策の一つの方法として、経済の状況、経営の環境及び株価を総合的に勘案しながら、自己株式の取得についても弾力的に実施してまいります。

当社は9月30日を基準日とする中間配当と期末配当の年2回の剰余金の配当を行うことができる旨定款に定めております。また、これらの剰余金の配当の決定機関は、期末配当については株主総会、中間配当については取締役会であります。

当期（2018年3月期）の期末配当につきましては、株主の皆様への継続的な利益還元及び今後の企業価値向上を目的とする事業展開のための内部留保等を勘案した結果、当事業年度（第1期を除く）を基準とした配当性向（当期は第18期であるため、親会社株主に帰属する連結当期純利益の17%）もしくは2015年3月期の普通配当と同額である1株当たり配当金2円35銭のどちらか高いほうを目処とした結果、1株当たり2円35銭の期末配当を実施する方針といたしました。

なお、当事業年度に係る剰余金の配当は以下の通りであります。

決議年月日	配当金の総額（百万円）	1株当たり配当額（円）
2018年6月27日 定時株主総会決議	91	2.35

次期以降の3ヶ年（第19期～第21期）につきましては、下記の通り当事業年度（第1期を除く）を基準とした配当性向もしくは1株当たり配当金2円40銭を基準に每期10銭を増配した1株当たり配当金のどちらか高い方を目途とし、毎期の定時株主総会決議によりご承認いただきます。

ただし、大きな業績変動や大規模なM&A等の経営環境等の変化によって、次期以降の3ヶ年（第19期～第21期）の配当方針を変更する可能性があることにご留意ください。

<次期以降の3ヶ年（第19期～第21期）の配当方針>

決算期	第19期 (2019年3月期)	第20期 (2020年3月期)	第21期 (2021年3月期)
配当方針	配当性向18% もしくは 1株当たり2円40銭の高い方	配当性向19% もしくは 1株当たり2円50銭の高い方	配当性向20% もしくは 1株当たり2円60銭の高い方

4【株価の推移】

（1）【最近5年間の事業年度別最高・最低株価】

回次	第14期	第15期	第16期	第17期	第18期
決算年月	2014年3月	2015年3月	2016年3月	2017年3月	2018年3月
最高（円）	655,000 □3,345	2,168	1,252	1,367	714
最低（円）	86,500 □764	909	432	435	447

（注）1. 最高・最低株価は、東京証券取引所マザーズ市場におけるものであります。

2. □印は、株式分割（2013年10月1日、1株→500株）による権利落後の最高・最低株価を示しております。

（2）【最近6月間の月別最高・最低株価】

月別	2017年10月	2017年11月	2017年12月	2018年1月	2018年2月	2018年3月
最高（円）	496	701	714	706	693	513
最低（円）	479	501	598	634	462	476

（注）最高・最低株価は、東京証券取引所マザーズ市場におけるものであります。

5【役員の状況】

男性 8名 女性 1名 (役員のうち女性の比率11%)

役名	職名	氏名	生年月日	略歴	任期	所有株式数 (株)
取締役社長 (代表 取締役)	—	岡村 陽久	1980年4月8日生	2000年8月 アドウェイズエージェンシー創業 2001年2月 当社設立 代表取締役(現任) 2003年12月 愛徳威軟件開発(上海)有限公司 董事長 2007年2月 愛徳威広告(上海)有限公司 董事 2007年7月 愛徳威軟件開発(上海)有限公司 董事 2008年8月 トイビー・エンタテインメント株 式会社(株式会社エムアップAEに 商号変更し、2013年5月1日付で株 式会社エムアップに吸収合併) 取 締役 2009年4月 株式会社アドウェイズ・プラネット (現 株式会社おくりパント) 取締 役 2009年6月 株式会社アドウェイズブックス(現 株式会社STANDARD MAGAZINE) 取締 役 2010年11月 愛徳威信息科技(上海)有限公司 董事 2011年2月 株式会社アドウェイズ・ベンチャー ズ 取締役 2012年5月 株式会社サムライリンク(現 株式会 社サムライ・アドウェイズ) 代表 取締役 2012年7月 株式会社アドウェイズ・ラボット (現 ラボット株式会社) 代表取締 役 2012年9月 株式会社muamua games(現 株式会 社バンオリュース) 代表取締役 2013年7月 Bulbit株式会社 取締役 2014年12月 株式会社アドウェイズ・スタジオ (現 株式会社七転八起) 代表取締 役 2014年12月 株式会社アドウェイズ・サポート (現 株式会社アドウェイズ・フロン ティア) 代表取締役	2017年6月 の定時株主 総会から2 年	8,149,300
取締役	国内事業担当	西岡 明彦	1977年8月25日生	2003年4月 当社入社 2006年4月 当社ファイナンス&アドミニストレ ーショングループ グループマネー ジャー 2008年4月 当社ビジネスデベロップメントグル ープ モバイル担当グループマネー ジャー 2008年8月 トイビー・エンタテインメント株 式会社(株式会社アドウェイズ・エ ンタテインメントに商号変更後、株 式会社エムアップAEに商号変更 し、2013年5月1日付で株式会社エ ムアップに吸収合併) 取締役 2008年10月 当社モバイル担当執行役員 2009年4月 株式会社アドウェイズ・プラネット (現 株式会社おくりパント) 代 表取締役 2010年6月 当社取締役 モバイルグループ担当 2011年2月 株式会社アドウェイズ・ベンチャー ズ 代表取締役(現任) 2011年3月 当社取締役 ビジネスデベロップメ ントグループ担当 2011年6月 ADWAYS TECHNOLOGY VIETNAM JSC. 取締役 2012年10月 当社取締役 国内事業担当(現任) 2015年2月 ADWAYS PHILIPPINES INC. 取締役 (現任) 2018年1月 Brasta株式会社 取締役(現任) ADWAYS TECHNOLOGY VIENTNAM JSC. 代表取締役(現任)	2018年6月 の定時株主 総会から2 年	21,500

役名	職名	氏名	生年月日	略歴	任期	所有株式数 (株)
取締役	グローバル事業担当	野田 順義	1978年5月10日生	2009年3月 当社入社 2011年6月 当社スマートフォン担当執行役員 株式会社アドウェイズ・ブラネット (現 株式会社おくりバント) 取締役 2011年9月 株式会社ラビオンソーシャル 取締役 2011年10月 当社ビジネスデベロップメントグループ担当執行役員 2012年1月 当社広告事業兼海外事業グループ北米担当執行役員 2012年4月 ADWAYS INTERACTIVE, INC. 代表取締役 2012年9月 株式会社muamua games (現 株式会社パシオリユース) 取締役 2012年10月 当社グローバル事業担当執行役員 ADWAYS KOREA, INC. 代表取締役 2013年5月 JS ADWAYS MEDIA INC. 取締役 (現任) 2013年6月 当社取締役 海外事業担当 2013年8月 ADWAYS INTERACTIVE, INC. 取締役 2013年9月 ADWAYS KOREA, INC. 取締役 (現任) 2014年1月 愛徳威広告 (上海) 有限公司 董事 (現任) 2015年4月 株式会社アドウェイズ・ベンチャーズ 取締役 (現任) 2015年5月 ADWAYS VIETNAM CO., LTD. (現 VIETNAM APP MARKETING CO., LTD.) 取締役 2015年7月 当社取締役 グローバル事業担当 (現任) 2015年8月 ADWAYS ASIA HOLDINGS LTD. 取締役 (現任) ADWAYS HONGKONG LTD. 代表取締役 2015年12月 ADWAYS HONGKONG LTD. 取締役 (現任) 2016年3月 ADWAYS INNOVATIONS SINGAPORE PTE. LTD. 取締役 (現任) 2016年8月 株式会社サムライ・アドウェイズ 取締役 (現任) PT. ADWAYS INDONESIA (現 PT INDONESIA APP MARKETING INNOVATION) 取締役 2017年1月 ADWAYS LABS (THAILAND) CO., LTD. (現 APP MARKETING PARTNER CO., LTD.) 取締役 2017年6月 ADWAYS INNOVATIONS INDIA PVT. 取締役 (現任) 2017年8月 ENRICHMENT MEDIA INC. 取締役 (現任) 2017年9月 ADWAYS LABS (THAILAND) CO., LTD. (現 APP MARKETING PARTNER CO., LTD.) 代表取締役 2018年4月 愛徳威軟件開発 (上海) 有限公司 董事 (現任) 2018年5月 ADWAYS INTERACTIVE, INC. 代表取締役 (現任) 2018年6月 Bulbit株式会社 取締役 (現任)	2018年6月の定時株主総会から2年	2,500

役名	職名	氏名	生年月日	略歴	任期	所有株式数 (株)
取締役	新規領域担当	山田 翔	1985年3月15日生	2007年4月 当社入社 2013年6月 ライヴエイド株式会社 取締役 2013年7月 Bulbit株式会社 代表取締役（現任） 2014年4月 当社新規領域担当執行役員 2014年4月 株式会社アドウェイズ・ベンチャーズ 取締役（現任） 2014年5月 株式会社アドウェイズ・ラボット（現ラボット株式会社）取締役（現任） 2015年7月 株式会社フィッティアー（現株式会社アドウェイズ・フロンティア）代表取締役 2016年1月 当社新規領域担当上席執行役員 2016年6月 当社取締役 新規領域担当（現任） 2016年8月 Mist Technologies株式会社 取締役（現任）	2018年6月の定時株主総会から2年	—
取締役	—	伊藤 浩孝	1968年12月10日生	1994年4月 中外製薬株式会社 探索研究所 研究員 1996年4月 Chugai Biopharmaceutical, Inc. 研究員 1998年4月 中外製薬株式会社 探索及び創薬研究所 研究員 2002年1月 東京大学先端科学技術研究センター 研究員 2005年4月 株式会社未来創薬研究所 研究員 2006年10月 ジーイー横河メディカルシステム株式会社（現 GEヘルスケア・ジャパン株式会社）分子イメージング・マーケティングリーダー 2008年3月 GEヘルスケア・ジャパン株式会社 マーケティング企画部 部長 2012年10月 GEヘルスケア・アジアパシフィック戦略マーケティング・ディレクター 2014年10月 京都大学 医工連携大学院 特別講師（現任） 2016年1月 GEヘルスケア・ジャパン株式会社 本社営業本部長 2017年4月 グロービス経営大学院 客員准教授（現任） 2017年10月 テカンジャパン株式会社 代表取締役社長（現任）	2018年6月の定時株主総会から2年	—
取締役	—	平田 和子	1952年3月6日生	1994年7月 クラリアントジャパン株式会社 人事部マネージャー 1999年1月 日本ジーイプラスチックス株式会社（現 SABICジャパン合同会社） 人事部 2003年5月 ジーイーフリートサービス株式会社（現 SMFLキャピタル株式会社） 人事総務部長 2006年5月 GEリアル・エステート株式会社（現 SMFLキャピタル株式会社） 人事マネージングディレクター（アジア・太平洋担当） 2012年7月 株式会社タフタッチ 代表取締役（現任）	2018年6月の定時株主総会から2年	—

役名	職名	氏名	生年月日	略歴	任期	所有株式数 (株)
常勤監査役	—	横山 寛美	1942年1月1日生	1965年4月 株式会社日本長期信用銀行（現株式会社新生銀行）入社 1985年9月 欧州長銀株式会社 社長 1989年4月 長銀ロスアンジェルス支店 支店長 1993年11月 パークレイズ信託銀行株式会社（現 ブラックロック・ジャパン株式会社）入社 代表取締役副社長 1995年4月 Cydsa株式会社 非常勤取締役 1996年4月 パークレイズ信託銀行株式会社（現 ブラックロック・ジャパン株式会社）代表取締役社長 2004年4月 Cydsa株式会社 顧問（現任） 2006年4月 名古屋商科大学大学院 講師 立命館アジア太平洋大学 客員教授 2006年6月 当社 常勤社外監査役（現任）	2018年6月の定時株主総会から4年	5,000
監査役	—	彦坂 浩一	1960年12月2日生	1983年4月 朝日信用金庫入社 1992年4月 弁護士登録 1992年4月 中島法律事務所（現中島・彦坂・久保内法律事務所）入所（現職） 1999年4月 関東弁護士会連合会理事 2001年12月 内閣司法制度改革推進本部事務局参事官補佐 2004年7月 内閣司法制度改革推進本部事務局企画官 2005年4月 日本弁護士連合会常務理事 2006年6月 当社社外取締役 2010年6月 当社監査役（現任） 2014年4月 東京弁護士会副会長 2015年6月 株式会社大氣社 社外監査役 2017年6月 株式会社大氣社 社外取締役（現任）	2018年6月の定時株主総会から4年	2,000
監査役	—	鵜川 正樹	1954年6月27日生	1977年4月 武蔵野市役所入所 1982年10月 監査法人中央会計事務所（現 PwCあらた有限責任監査法人）入所 1986年3月 公認会計士登録 1989年11月 パークレイズ信託銀行株式会社（現 ブラックロック・ジャパン株式会社）入社 経理部長 1991年10月 証券アナリスト協会検定会員登録 1999年3月 鵜川公認会計士事務所設立 所長（現任） 2000年7月 株式会社キャピタル・アセット・プランニング 監査役（現任） 2005年3月 税理士登録 2007年7月 監査法人ナカチ社員（現任） 2013年4月 青山学院大学大学院会計プロフェッション研究科 特任教授 2013年6月 当社社外監査役（現任） 2018年4月 武蔵野大学経済学部会計ガバナンス学科教授（現任）	2018年6月の定時株主総会から4年	—
計						8,180,300

- （注） 1. 取締役伊藤浩孝、平田和子は、社外取締役であります。
2. 監査役横山寛美、鵜川正樹は、社外監査役であります。
3. 当社は、意思決定・監督と執行の分離による取締役会の活性化のため、執行役員制度を導入しております。執行役員は5名で、上席執行役員管理担当 田中庸一、上席執行役員経営戦略担当 鹿野晋吾、執行役員HRM担当 松嶋良治、執行役員グローバル事業開発担当 李相元及び執行役員国内広告事業担当 中山祐太で構成されております。

4. 当社は、法令に定める社外監査役の員数を欠くこととなる場合に備え、会社法第329条第3項に定める補欠監査役を1名選任しております。補欠監査役の略歴は次のとおりであります。

氏名	生年月日	略歴	所有株式数 (株)
美澤 臣一	1960年6月22日生	1984年4月 西武建設株式会社入社 1989年4月 大和証券株式会社(現 株式会社大和証券グループ本社) 入社 1997年7月 ディー・ブレイン証券株式会社設立 代表取締役社長 1999年7月 トランス・コスモス株式会社入社 事業企画開発本部副本部長 2000年3月 ソフトブレイン株式会社 取締役 2000年6月 トランス・コスモス株式会社 取締役 2001年4月 同社常務取締役 事業推進本部長 2002年4月 同社常務取締役 事業開発統括本部長 2002年10月 同社専務取締役 サービス開発本部長 2003年4月 有限会社MSアソシエイツ(現 コ・クリエーションパートナーズ株式会社) 設立 代表取締役(現任) 2003年6月 ダブルクリック株式会社(2010年3月30日付でトランス・コスモス株式会社に吸収合併) 社外監査役 2004年4月 トランス・コスモス株式会社 専務取締役CFO(最高財務責任者) 2004年7月 株式会社ウェブクルー 社外監査役 2008年9月 株式会社マクロミル 社外取締役 2010年6月 株式会社ナノ・メディア 社外監査役 2011年7月 株式会社ザッパラス 社外取締役(現任) 2013年6月 ミナトエレクトロニクス株式会社(現 ミナトホールディングス株式会社) 社外監査役(現任) 2014年3月 ジグソー株式会社(現 JIG-SAW株式会社) 社外監査役 2016年3月 同社社外取締役監査等委員(現任)	—

6 【コーポレート・ガバナンスの状況等】

(1) 【コーポレート・ガバナンスの状況】

①企業統治の体制

イ. 企業統治の体制の概要

当社は、取締役会と監査役制度を採用しており、監査役からなる監査役会を構成し、これらの機関が中心となって、コーポレート・ガバナンスの維持・強化を図る体制を構築しております。当社の基本的な機関設計は、以下のとおりであります。

(取締役会)

当社取締役会は、取締役6名により構成され、環境変化に迅速に対応できる意思決定機関としつつ、社外から2名の取締役を招聘することで業務執行監督体制の整備、意思決定の公正化を図っております。常勤監査役は原則として全ての取締役会に出席することにより取締役会が求められる監督機能の実効性を高めております。なお、取締役会は、原則として毎月1回開催する定時取締役会と、必要に応じて開催する臨時取締役会により構成されております。

(監査役会)

当社の監査役会は監査役3名により構成され、常勤監査役を含め2名が社外監査役であります。各監査役は監査役会が定めた監査方針及び年間監査計画に基づき監査を行うほか、毎月開催される監査役会にて監査の実施状況や経営状況を共有化するなど監査役間のコミュニケーションの向上により監査の充実を図っております。また、監査役会は会計監査人及び内部監査部門であるコンプライアンス室と連携をとり経営監視機能の強化を図ると共に、社外取締役に対しオブザーバーとして監査役会への出席を求め、情報の共有に努めております。常勤監査役は原則として全ての取締役会へ出席しており、会計監査及び業務監査の観点より、経営全般に関する監査を行うほか、社内書類の閲覧等を通じ、社内の業務執行状況の確認も行なっております。

(会計監査人)

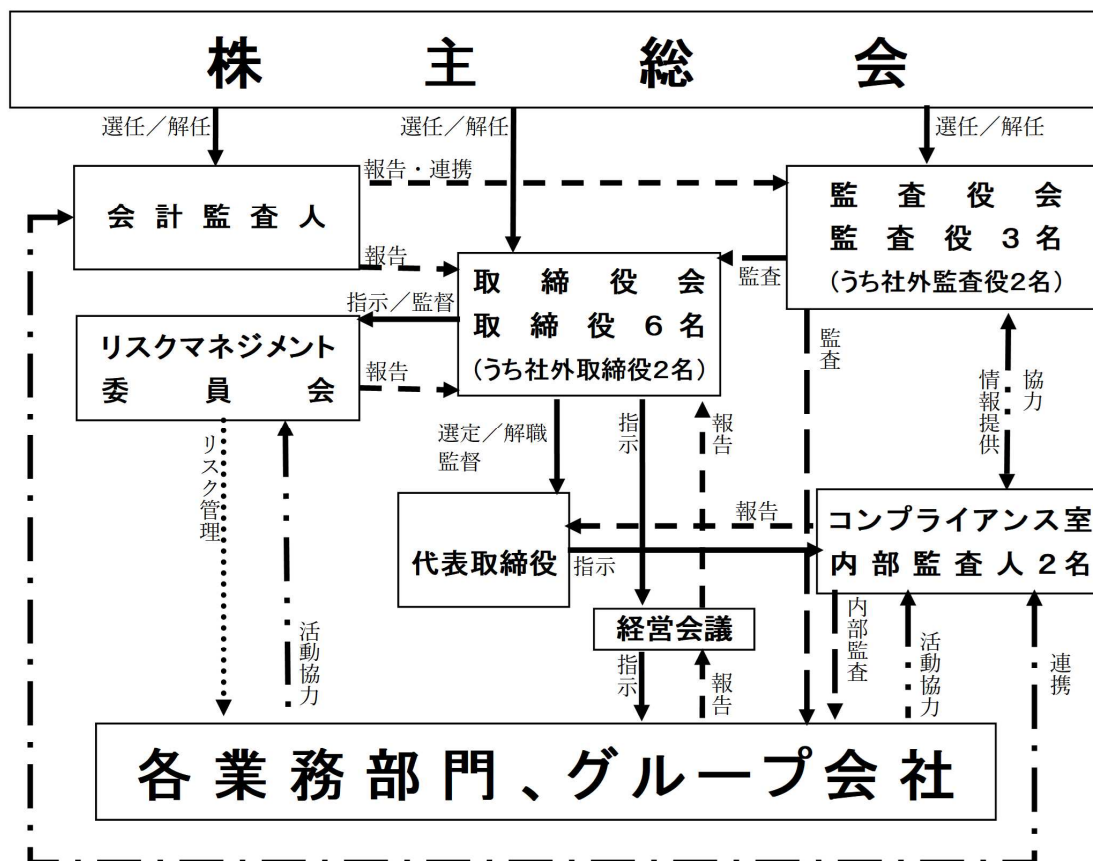
当社は、有限責任 あずさ監査法人を会計監査人として選任し、法定監査を受けております。

(リスクマネジメント委員会)

代表取締役を委員長とし、常勤の取締役及び監査役、コーポレートリレーショングループ本部長、コンプライアンス室長並びに顧問弁護士の委員で構成する「リスクマネジメント委員会」を半年に1回以上開催し、経営上のリスクの把握、リスクに対する未然防止策及び発生した際の対処方法を検討しております。

(経営会議)

代表取締役および代表取締役の承認した職位者により「経営会議」を1ヶ月に1回定例で開催し、経営計画、方針、事業計画、人員計画、営業戦略、販売計画、新規事業などの重要事項の立案及び実態把握を行っており、業務執行の監督及びリスク管理ができるようにしております。



当社の取締役会は、取締役6名（うち社外取締役2名）、監査役は3名（うち社外監査役2名）により構成されております。

ロ. 企業統治の体制を採用する理由

当社のコーポレート・ガバナンスに関する基本的な考え方は、企業価値の安定的な増大と株主重視の立場に立って経営の健全性の確保と透明性を高めることであり、そのために、最適利益と財務の健全性を追求すること、タイムリーディスクロージャーに対応した開示体制を構築すること、取締役及び監査役がそれぞれの独立性を保ち業務執行及び監督責任を果たすことを経営の最重要方針としており、上記企業統治の体制を採用しております。

ハ. その他企業統治に関する事項

・内部統制システムの整備の状況

当社の内部統制システムといたしましては、会社法に基づく「内部統制システム構築の基本方針」を定め、これに基づく構築を行うとともに、金融商品取引法に基づく内部統制システムを整備し、運用をいたしております。そして、コンプライアンス室におけるモニタリングにより、都度改善を図る等、随時体制の強化を図っております。

・リスク管理体制の整備の状況

リスク管理体制の整備状況については、リスク管理に関する規程の整備、様々なリスクの発生に対する未然の防止手続や発生した際の対処方法を検討するリスクマネジメント委員会を半年に1回以上開催しております。

・子会社の業務の適正を確保するための体制整備の状況

当社は、当社の子会社の業務の適正を確保するため、関係会社管理規程に基づき、当社の子会社の経営を指導・監督し、損失の危険を未然に把握して、その対処に努めるとともに、当社の子会社における一定の事項及びリスク情報に関しては、事前に当社に報告することを義務付け、一定の重要事項に関しては、当社取締役会の付議事項としております。また、当社の子会社の内部統制システムの構築に努め、必要な指導・監督を行っており、コンプライアンス室は、当社の子会社に対する監査を定期的の実施しております。

二、責任限定契約の内容の概要

当社と社外取締役及び監査役は、会社法第427条第1項の規定に基づき、同法第423条第1項の損害賠償責任を限定する契約を締結しております。当該契約に基づく損害賠償責任の限度額は、当社が社外取締役及び監査役に支払うべき金銭その他の財産上の利益の合計額のうち最も高い額の2倍の額としております。なお、当該責任限定が認められるのは、当該社外取締役または監査役が責任の原因となった職務の遂行について善意でかつ重大な過失がないときに限られます。

②内部監査及び監査役監査の状況

当社の内部監査は、コンプライアンス室2名が担当し、内部監査規程に基づき、経営活動が経営方針・事業計画に準拠し、合理的かつ効率的に行われているか、また、制度及び手続きの有効妥当性、関連法規・諸規定の遵守状況、会計その他記録及び各種報告が公正・正確かつ迅速に行われているか等の観点から監査を実施しております。

当社の監査役監査は、監査役3名が担当し、取締役会及び監査役会への出席の他、常勤監査役は各部署に対するヒアリング等を行い、経営監視機能の役割を果たしております。また、監査法人とも定期的、かつ必要に応じて会計情報等の意見交換の場を持っております。

なお、監査役鶴川正樹は、公認会計士の資格を有し、財務及び会計に関する相当程度の知見を有しております。

③会計監査の状況

当社の会計監査については、有限責任 あずさ監査法人と監査契約を締結し、会計監査業務を委嘱しております。

なお、当事業年度において業務を執行した公認会計士の氏名等、監査業務に係る補助者の構成については以下のとおりであります。

業務を遂行した公認会計士の氏名、所属する監査法人名及び継続関与年数

業務を遂行した公認会計士の氏名：井指 亮一、八鍬 賢也

所属する監査法人名及び継続関与年数：有限責任 あずさ監査法人

※継続関与年数については、全員7年未満であるため、記載を省略しております。

監査業務における補助者の構成：公認会計士5名 その他10名

④社外取締役及び社外監査役

当社の社外取締役は2名、社外監査役は2名であります。

社外取締役伊藤浩孝及び平田和子は、社外取締役の要件を満たしております。伊藤浩孝及び平田和子と当社との間に人的関係、資本的关系または取引関係その他の利害関係はありません。

社外監査役横山寛美及び鶴川正樹は、社外監査役の要件を満たしております。横山寛美及び鶴川正樹と当社との間に人的関係または取引関係その他の利害関係はありません。

当社は、社外取締役及び社外監査役に対して、取締役会の意思決定の適正性を確保するため及び経営の透明性や客観性を高めていく事を期待し、独立性のある者を選任しております。

社外取締役は監査役会に出席するなど、適宜意見交換を行っている他、社外監査役を含めた監査役はコンプライアンス室との緊密な連携を保ち、内部監査の実施状況について報告を受けるとともに、監査法人とも定期的、かつ必要に応じて意見交換を行っております。

社外取締役及び社外監査役全員は、株式会社東京証券取引所の定めに基づく判断基準のいずれの項目にも該当せず、また、当社との間に特別の利害関係等はありません。従って一般株主と利益相反が生じるおそれがないと判断し、独立役員として適任であると考え、同取引所に届け出ております。

なお、当社は社外役員の選任にあたり、独立性に関する基準又は方針として明確に定めたものではありませんが、経歴や当社との関係を踏まえて、一般株主と利益相反が生じるおそれがないものとする、当社経営陣から独立した立場で社外役員としての職務を遂行できる十分な独立性が確保できること等を個別に判断しております。

⑤役員報酬等

イ. 役員区分ごとの報酬等の総額、報酬等の種類別の総額及び対象となる役員の員数

区 分	報酬等の総額	報酬等の種類別の総額		対象となる 役員の員数
		基本報酬	ストックオプション	
取締役 (社外取締役を除く)	96,737千円	96,737千円	—	4名
監査役 (社外監査役を除く)	8,400千円	8,400千円	—	2名
社外役員	20,325千円	20,325千円	—	4名

ロ. 役員の報酬等の額又はその算定方法の決定に関する方針の内容及び決定方法

当社の役員の報酬等の額又はその算定方法の決定は、株主総会において承認された額の中において、前事業年度の業績と経済情勢を鑑み基本報酬を決定しております。

⑥株式の保有状況

イ. 投資株式のうち保有目的が純投資目的以外の目的であるものの銘柄数及び貸借対照表計上額の合計額

57銘柄 940,088千円

ロ. 保有目的が純投資目的以外の目的である投資株式の保有区分、銘柄、株式数、貸借対照表計上額及び保有目的

前事業年度
特定投資株式

銘柄	株式数(株)	貸借対照表計上額(千円)	保有目的
株式会社ネットマーケティング	196,000	319,480	継続的な営業関係強化のため
株式会社gumi	100,000	119,000	継続的な営業関係強化のため
ヒロセ通商株式会社	50,000	85,750	継続的な営業関係強化のため
サイジニア株式会社	6,786	16,313	継続的な営業関係強化のため
株式会社エムアップ	14,000	12,124	継続的な営業関係強化のため
株式会社リアルワールド	1,000	2,071	継続的な営業関係強化のため

当事業年度
特定投資株式

銘柄	株式数(株)	貸借対照表計上額(千円)	保有目的
株式会社ネットマーケティング	392,000	321,832	継続的な営業関係強化のため
ヒロセ通商株式会社	50,000	111,000	継続的な営業関係強化のため
株式会社gumi	100,000	107,400	継続的な営業関係強化のため
サイジニア株式会社	6,786	11,576	継続的な営業関係強化のため
株式会社エムアップ	14,000	15,512	継続的な営業関係強化のため
株式会社リアルワールド	1,000	1,307	継続的な営業関係強化のため

ハ. 保有目的が純投資目的である投資株式の前事業年度及び当事業年度における貸借対照表計上額の合計額並びに当事業年度における受取配当金、売却損益及び評価損益の合計額

該当事項はありません。

⑦取締役の定数

当社の取締役は、6名以内とする旨定款に定めております。

⑧取締役の選任及び解任の決議要件

当社は、取締役の選任決議については、株主総会によって行い、議決権を行使することができる株主の3分の1以上を有する株主が出席し、その議決権の過半数をもって行う旨定款に定めております。また、取締役の選任決議は、累積投票によらないものとする旨定款に定めております。

解任決議については、株主総会によって行い、議決権を行使することができる株主の過半数を有する株主が出席し、その議決権の3分の2以上をもって行う旨定款に定めております。

⑨中間配当

当社は、株主への機動的な利益還元を行うため、会社法第454条第5項の規定により、取締役会の決議によって毎年9月30日を基準日として、中間配当を行うことができる旨定款に定めております。

⑩自己株式の取得

当社は、会社法第165条第2項の規定に基づき、取締役会の決議により市場取引等により自己の株式を取得することができる旨定款に定めております。これは経済情勢の変化に対応して、資本政策を機動的に実施することを目的とするものであります。

⑪取締役及び監査役の責任免除

当社は、会社法第426条第1項の規定に基づき、取締役会の決議により同法第423条第1項に規定する取締役（取締役であった者を含む）及び監査役（監査役であった者を含む）の損害賠償責任を法令の限度において免除することができる旨定款に定めております。これは取締役及び監査役が、期待される役割を十分に発揮されることを目的とするものであります。

⑫株主総会の特別決議要件

当社は、会社法第309条第2項に定める株主総会の特別決議要件について、議決権を行使することができる株主の議決権の3分の1以上を有する株主が出席し、その議決権の3分の2以上をもって行う旨定款に定めております。これは、株主総会における特別決議の定足数を緩和することにより、株主総会の円滑な運営を行うことを目的とするものであります。

⑬会計監査人との責任限定契約

当社と会計監査人である有限責任 あずさ監査法人は、会社法第427条第1項の規定に基づき、同法第423条第1項の損害賠償責任を限定する契約を締結しており、当該契約に基づく損害賠償責任の限度額は当社が会計監査人に支払うべき金銭その他の財産上の利益の合計額のうち、最も高い額の2倍の額としております。

(2) 【監査報酬の内容等】

①【監査公認会計士等に対する報酬の内容】

区分	前連結会計年度		当連結会計年度	
	監査証明業務に基づく報酬（千円）	非監査業務に基づく報酬（千円）	監査証明業務に基づく報酬（千円）	非監査業務に基づく報酬（千円）
提出会社	35,000	—	34,800	—
連結子会社	—	—	—	—
計	35,000	—	34,800	—

②【その他重要な報酬の内容】

(前連結会計年度)

当社の会計監査人である有限責任あずさ監査法人と同一のネットワークに属している国外のKPMGメンバーファームに対する報酬額は2,209千円になります。

(当連結会計年度)

当社の会計監査人である有限責任あずさ監査法人と同一のネットワークに属している国外のKPMGメンバーファームに対する報酬額は8,354千円になります。

③【監査公認会計士等の提出会社に対する非監査業務の内容】

(前連結会計年度)

該当事項はありません。

(当連結会計年度)

該当事項はありません。

④【監査報酬の決定方針】

当社の監査報酬の決定方針については、監査時間の見積りに基づく監査報酬を元に、管理部門が交渉を行い、取締役会にて監査報酬を決議し、監査役会の同意を得ております。

第5【経理の状況】

1. 連結財務諸表及び財務諸表の作成方法について

- (1) 当社の連結財務諸表は、「連結財務諸表の用語、様式及び作成方法に関する規則」（昭和51年大蔵省令第28号）に基づいて作成しております。
- (2) 当社の財務諸表は、「財務諸表等の用語、様式及び作成方法に関する規則」（昭和38年大蔵省令第59号。以下「財務諸表等規則」という。）に基づいて作成しております。
また、当社は、特例財務諸表提出会社に該当し、財務諸表等規則第127条の規定により財務諸表を作成しております。

2. 監査証明について

当社は、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づき、連結会計年度（2017年4月1日から2018年3月31日まで）の連結財務諸表及び事業年度（2017年4月1日から2018年3月31日まで）の財務諸表について、有限責任あずさ監査法人による監査を受けております。

3. 連結財務諸表等の適正性を確保するための特段の取組みについて

当社は、連結財務諸表等の適正性を確保するための、特段の取組みを行っております。具体的には、会計基準等の内容を適切に把握し、会計基準等の変更等についての的確に対応することができる体制を整備するため、公益財団法人財務会計基準機構へ加入しております。

1 【連結財務諸表等】

(1) 【連結財務諸表】

① 【連結貸借対照表】

(単位：千円)

	前連結会計年度 (2017年3月31日)	当連結会計年度 (2018年3月31日)
資産の部		
流動資産		
現金及び預金	8,853,650	9,491,272
受取手形及び売掛金	6,360,872	5,543,958
たな卸資産	※3 7,711	※3 4,901
繰延税金資産	25,352	20,108
その他	432,401	451,033
貸倒引当金	△230,698	△295,581
流動資産合計	15,449,290	15,215,693
固定資産		
有形固定資産		
建物	293,768	349,104
減価償却累計額	△139,321	△159,280
建物（純額）	154,447	189,823
工具、器具及び備品	415,666	436,303
減価償却累計額	△294,140	△326,497
工具、器具及び備品（純額）	121,525	109,806
有形固定資産合計	275,973	299,630
無形固定資産		
のれん	196,269	101,859
その他	122,288	235,972
無形固定資産合計	318,557	337,831
投資その他の資産		
投資有価証券	※1 1,655,215	※1 1,564,533
その他	※1 741,441	※1 679,072
貸倒引当金	△123,698	△174,845
投資その他の資産合計	2,272,959	2,068,760
固定資産合計	2,867,490	2,706,222
資産合計	18,316,780	17,921,916
負債の部		
流動負債		
支払手形及び買掛金	5,284,414	5,204,945
未払法人税等	68,995	34,548
その他	1,790,846	1,491,926
流動負債合計	7,144,256	6,731,420
固定負債		
繰延税金負債	12,255	46,305
その他	108,738	121,286
固定負債合計	120,994	167,591
負債合計	7,265,250	6,899,012
純資産の部		
株主資本		
資本金	1,605,258	1,605,955
資本剰余金	7,294,951	7,280,768
利益剰余金	2,771,058	2,689,686
自己株式	△1,406,527	△1,406,575
株主資本合計	10,264,742	10,169,835
その他の包括利益累計額		
その他有価証券評価差額金	320,418	339,466
為替換算調整勘定	337,885	381,396
その他の包括利益累計額合計	658,304	720,863
新株予約権	5,447	5,034
非支配株主持分	123,035	127,171
純資産合計	11,051,530	11,022,904
負債純資産合計	18,316,780	17,921,916

②【連結損益計算書及び連結包括利益計算書】

【連結損益計算書】

(単位：千円)

	前連結会計年度 (自 2016年4月1日 至 2017年3月31日)	当連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)
売上高	42,329,478	41,501,338
売上原価	34,994,065	34,327,898
売上総利益	7,335,412	7,173,440
販売費及び一般管理費	※1, ※2 7,019,719	※1, ※2 6,874,093
営業利益	315,693	299,346
営業外収益		
受取利息	44,119	45,436
受取配当金	1,108	104,518
外国税還付金	17,233	7,923
補助金収入	7,400	1,580
消費税等免除益	502	15
投資有価証券評価益	-	186,611
その他	8,698	26,747
営業外収益合計	79,063	372,832
営業外費用		
為替差損	62,428	-
投資有価証券評価損	10,196	-
持分法による投資損失	5,161	25,888
貸倒引当金繰入額	39,353	52,718
その他	29,408	17,612
営業外費用合計	146,548	96,219
経常利益	248,208	575,959
特別利益		
投資有価証券売却益	51,724	19,480
関係会社株式売却益	25,476	32,202
特別利益合計	77,200	51,683
特別損失		
固定資産売却損	67	23,978
関係会社株式評価損	98,481	50,424
関係会社株式売却損	-	19,601
投資有価証券評価損	285,005	265,017
減損損失	※3 134,566	※3 65,819
特別損失合計	518,122	424,841
税金等調整前当期純利益又は税金等調整前当期純損失(△)	△192,713	202,801
法人税、住民税及び事業税	211,689	156,054
法人税等調整額	33,812	30,926
法人税等合計	245,501	186,980
当期純利益又は当期純損失(△)	△438,215	15,820
非支配株主に帰属する当期純利益	12,610	5,843
親会社株主に帰属する当期純利益又は親会社株主に帰属する当期純損失(△)	△450,825	9,977

【連結包括利益計算書】

(単位：千円)

	前連結会計年度 (自 2016年4月1日 至 2017年3月31日)	当連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)
当期純利益又は当期純損失(△)	△438,215	15,820
その他の包括利益		
その他有価証券評価差額金	280,319	19,047
為替換算調整勘定	△121,110	49,539
その他の包括利益合計	※1 159,209	※1 68,587
包括利益	△279,006	84,407
(内訳)		
親会社株主に係る包括利益	△287,882	72,535
非支配株主に係る包括利益	8,875	11,871

③【連結株主資本等変動計算書】

前連結会計年度（自 2016年4月1日 至 2017年3月31日）

（単位：千円）

	株主資本				
	資本金	資本剰余金	利益剰余金	自己株式	株主資本合計
当期首残高	1,605,258	7,294,982	3,317,590	△406,577	11,811,255
当期変動額					
剰余金の配当			△95,705		△95,705
新株の発行（新株予約権の行使）					—
親会社株主に帰属する当期純利益又は親会社株主に帰属する当期純損失（△）			△450,825		△450,825
自己株式の取得				△999,950	△999,950
連結子会社の清算					—
非支配株主との取引に係る親会社の持分変動		△30			△30
株主資本以外の項目の当期変動額（純額）					
当期変動額合計	—	△30	△546,531	△999,950	△1,546,513
当期末残高	1,605,258	7,294,951	2,771,058	△1,406,527	10,264,742

	その他の包括利益累計額			新株予約権	非支配株主持分	純資産合計
	その他有価証券評価差額金	為替換算調整勘定	その他の包括利益累計額合計			
当期首残高	40,099	455,261	495,360	60,951	122,160	12,489,728
当期変動額						
剰余金の配当						△95,705
新株の発行（新株予約権の行使）						—
親会社株主に帰属する当期純利益又は親会社株主に帰属する当期純損失（△）						△450,825
自己株式の取得						△999,950
連結子会社の清算						—
非支配株主との取引に係る親会社の持分変動						△30
株主資本以外の項目の当期変動額（純額）	280,319	△117,376	162,943	△55,503	875	108,315
当期変動額合計	280,319	△117,376	162,943	△55,503	875	△1,438,197
当期末残高	320,418	337,885	658,304	5,447	123,035	11,051,530

当連結会計年度（自 2017年4月1日 至 2018年3月31日）

（単位：千円）

	株主資本				
	資本金	資本剰余金	利益剰余金	自己株式	株主資本合計
当期首残高	1,605,258	7,294,951	2,771,058	△1,406,527	10,264,742
当期変動額					
剰余金の配当			△91,052		△91,052
新株の発行（新株予約権の行使）	696	696			1,393
親会社株主に帰属する当期純利益又は親会社株主に帰属する当期純損失（△）			9,977		9,977
自己株式の取得				△47	△47
連結子会社の清算			△297		△297
非支配株主との取引に係る親会社の持分変動		△14,880			△14,880
株主資本以外の項目の当期変動額（純額）					
当期変動額合計	696	△14,183	△81,372	△47	△94,906
当期末残高	1,605,955	7,280,768	2,689,686	△1,406,575	10,169,835

	その他の包括利益累計額			新株予約権	非支配株主持分	純資産合計
	その他有価証券評価差額金	為替換算調整勘定	その他の包括利益累計額合計			
当期首残高	320,418	337,885	658,304	5,447	123,035	11,051,530
当期変動額						
剰余金の配当						△91,052
新株の発行（新株予約権の行使）						1,393
親会社株主に帰属する当期純利益又は親会社株主に帰属する当期純損失（△）						9,977
自己株式の取得						△47
連結子会社の清算						△297
非支配株主との取引に係る親会社の持分変動						△14,880
株主資本以外の項目の当期変動額（純額）	19,047	43,511	62,558	△413	4,135	66,280
当期変動額合計	19,047	43,511	62,558	△413	4,135	△28,626
当期末残高	339,466	381,396	720,863	5,034	127,171	11,022,904

④【連結キャッシュ・フロー計算書】

(単位：千円)

	前連結会計年度 (自 2016年4月1日 至 2017年3月31日)	当連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)
営業活動によるキャッシュ・フロー		
税金等調整前当期純利益又は税金等調整前当期純損失(△)	△192,713	202,801
減価償却費	143,756	142,305
のれん償却額	61,802	38,590
貸倒引当金の増減額(△は減少)	117,209	102,605
受取利息及び受取配当金	△45,227	△149,955
支払利息	44	—
減損損失	134,566	65,819
有形固定資産売却損益(△は益)	10	—
固定資産除却損	—	23,978
投資有価証券売却及び評価損益(△は益)	243,477	58,925
関係会社株式評価損	98,481	50,424
関係会社株式売却損益(△は益)	△25,476	△12,600
持分法による投資損益(△は益)	5,161	25,888
為替差損益(△は益)	1,275	36
補助金収入	△7,400	△1,580
売上債権の増減額(△は増加)	△58,632	877,789
仕入債務の増減額(△は減少)	△280,134	△105,587
未払消費税等の増減額(△は減少)	82,832	△253,293
未払金及び未払費用の増減額(△は減少)	13,830	△24,581
その他	50,487	199,181
小計	343,352	1,240,747
利息及び配当金の受取額	42,991	49,109
利息の支払額	△44	—
補助金の受取額	7,400	1,580
法人税等の支払額	△447,351	△196,413
営業活動によるキャッシュ・フロー	△53,650	1,095,023
投資活動によるキャッシュ・フロー		
有形固定資産の取得による支出	△45,894	△138,708
無形固定資産の取得による支出	△8,531	△162,027
定期預金の純増減額(△は増加)	△252,920	536,320
投資有価証券の取得による支出	△330,000	△261,466
投資有価証券の売却による収入	80,373	22,268
関係会社株式の取得による支出	—	△120,000
関係会社株式の売却による収入	4,104	7
連結の範囲の変更を伴う子会社株式の売却による収入	794	0
連結の範囲の変更を伴う子会社株式の売却による支出	△7,665	△2,013
連結の範囲の変更を伴う子会社株式の取得による支出	※2 △210,100	—
貸付けによる支出	△34,986	△15,580
貸付金の回収による収入	28,777	37,264
資産除去債務の履行による支出	—	△15,570
事業譲受による支出	※3 △155,700	※3 △10,000
投資事業組合からの分配による収入	24,997	257,044
その他	△80,331	61,420
投資活動によるキャッシュ・フロー	△987,083	188,958
財務活動によるキャッシュ・フロー		
短期借入れによる収入	160,000	—
短期借入金の返済による支出	△160,204	—
新株予約権の行使による株式の発行による収入	—	980
自己株式の取得による支出	△1,002,001	△48
配当金の支払額	△94,541	△90,381
非支配株主への配当金の支払額	△10,859	△5,275
連結の範囲の変更を伴わない子会社株式の取得による支出	△1,120	△61,984
新株予約権の買入消却による支出	△55,503	—
財務活動によるキャッシュ・フロー	△1,164,231	△156,710
現金及び現金同等物に係る換算差額	△112,977	46,670
現金及び現金同等物の増減額(△は減少)	△2,317,942	1,173,942
現金及び現金同等物の期首残高	10,635,272	8,317,330
現金及び現金同等物の期末残高	※1 8,317,330	※1 9,491,272

【注記事項】

(連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項)

1. 連結の範囲に関する事項

(1) 連結子会社の数 24社

連結子会社の名称

愛徳威軟件開発(上海)有限公司

愛徳威広告(上海)有限公司

株式会社おくりバント

愛徳威信息科技(上海)有限公司

ADWAYS ASIA HOLDINGS LTD.

ADWAYS TECHNOLOGY LTD.

株式会社サムライ・アドウェイズ

ラボット株式会社

JS ADWAYS MEDIA INC.

Brasta株式会社(旧コパンコ株式会社)

ADWAYS INTERACTIVE, INC.

ADWAYS KOREA, INC.

株式会社七転八起

亜堂科技(上海)有限公司

Bulbit株式会社

株式会社楽一番

株式会社アドウェイズ・フロンティア(旧株式会社フィッティアー)

ADWAYS HONGKONG LTD.

ADWAYS TECHNOLOGY HONGKONG LTD.

株式会社MAGICA(旧株式会社アイドテック)

ADWAYS INNOVATIONS SINGAPORE PTE. LTD.

ADWAYS INNOVATIONS INDIA PVT. LTD.

Mist Technologies株式会社

Enrichment Media Inc.

当連結会計年度において、新規設立に伴い、Enrichment Media Inc.を追加しております。

一方で、上海友付網絡科技有限公司を清算したことにより、コパン株式会社及び株式会社ラビオンソーシャルを株式の売却により、連結の範囲から除外しております。

(2) 非連結子会社の数 4社

主要な非連結子会社の名称

株式会社アドウェイズ・ベンチャーズ

ADWAYS PHILIPPINES INC.

ADWAYS TECHNOLOGY VIETNAM JSC

(連結の範囲から除いた理由)

非連結子会社は、小規模であり、総資産、売上高、当期純損益及び利益剰余金(持分に見合う額)等は、いずれも連結財務諸表に重要な影響を及ぼしていないため、連結の範囲から除いております。

2. 持分法の適用に関する事項

(1) 持分法適用の関連会社 2社

持分法適用の関連会社の名称

ライヴエイド株式会社

愛客彩股份有限公司

(2) 持分法を適用しない非連結子会社 4社

主要な非連結子会社の名称

上記1(2)に記載した非連結子会社

(持分法を適用しない理由)

当期純損益(持分に見合う額)及び利益剰余金(持分に見合う額)等からみて、持分法の対象から除いても連結財務諸表に及ぼす影響が軽微であり、かつ、重要性がないため持分法の適用範囲から除外しております。

3. 連結子会社の事業年度等に関する事項

連結子会社のうち、愛徳威軟件開発（上海）有限公司、愛徳威広告（上海）有限公司、愛徳威信息科技有限公司（上海）有限公司、ADWAYS ASIA HOLDINGS LTD.、ADWAYS TECHNOLOGY LTD.、JS ADWAYS MEDIA INC.、ADWAYS INTERACTIVE, INC.、ADWAYS KOREA, INC.、亜堂科技（上海）有限公司、ADWAYS INNOVATIONS SINGAPORE PTE. LTD.、ADWAYS HONGKONG LTD.、ADWAYS TECHNOLOGY HONGKONG LTD. 及び Enrichment Media Inc. の決算日は12月31日であります。

連結財務諸表の作成に当たって、愛徳威軟件開発（上海）有限公司、愛徳威広告（上海）有限公司、愛徳威信息科技有限公司（上海）有限公司、ADWAYS ASIA HOLDINGS LTD.、ADWAYS TECHNOLOGY LTD.、JS ADWAYS MEDIA INC.、ADWAYS INTERACTIVE, INC.、ADWAYS KOREA, INC.、亜堂科技（上海）有限公司、ADWAYS INNOVATIONS SINGAPORE PTE. LTD.、ADWAYS HONGKONG LTD.、ADWAYS TECHNOLOGY HONGKONG LTD. 及び Enrichment Media Inc. については、同決算日現在の財務諸表を使用しております。ただし、1月1日から連結決算日3月31日までの期間に発生した重要な取引については、連結上必要な調整を行っております。

4. 会計方針に関する事項

(1) 重要な資産の評価基準及び評価方法

① 有価証券

(1) 子会社株式及び関連会社株式（子会社出資金及び関連会社出資金を含む）

移動平均法による原価法を採用しております。

(2) その他有価証券

時価のあるもの

連結会計年度末日の市場価格等に基づく時価法（評価差額は、全部純資産直入法により処理し、売却原価は、移動平均法により算定）によっております。

時価のないもの

移動平均法による原価法を採用しております。

当社が出資する投資事業組合等に対する出資持分の損益のうち当社に帰属する持分相当額については、純額で取り込み、営業外損益に計上するとともに「投資有価証券」を加減する処理を行っております。

② たな卸資産

(1) 商品及び製品

主として、先入先出法による原価法（連結貸借対照表価額は収益性の低下に基づく簿価切下げの方法により算定）を採用しております。

(2) 原材料及び貯蔵品

先入先出法による原価法（連結貸借対照表価額は収益性の低下に基づく簿価切下げの方法により算定）を採用しております。

(2) 重要な減価償却資産の減価償却の方法

① 有形固定資産

当社及び国内連結子会社は定率法を、また在外連結子会社は定額法を採用しております。ただし、当社及び国内連結子会社についても2016年4月1日以降に取得した建物については、定額法を採用しております。

主な耐用年数

建物	2～15年
----	-------

工具、器具及び備品	3～10年
-----------	-------

また、2007年3月31日以前に取得したものについては、償却可能限度額まで償却が終了した翌年から5年間で均等償却する方法によっております。

② 無形固定資産

当社は定額法を採用しております。

なお、自社利用のソフトウェアについては、社内における利用可能期間（5年以内）に基づいております。

③ 繰延資産の処理方法

創立費、株式交付費

支出時に全額費用としております。

(3) 重要な引当金の計上基準

貸倒引当金

債権の貸倒れによる損失に備えるため、一般債権については貸倒実績率により、貸倒懸念債権等特定の債権については個別に回収可能性を勘案し、回収不能見込額を計上しております。

(4) のれんの償却方法及び償却期間

のれんの償却については、5年間の定額法により償却を行っております。

(5) 連結キャッシュ・フロー計算書における資金の範囲

手許現金、随時引き出し可能な預金及び容易に換金可能であり、かつ、価値の変動について僅少なリスクしか負わない取得日から3か月以内に償還期限の到来する短期投資からなっております。

(6) その他連結財務諸表作成のための重要な事項

消費税等の会計処理

税抜方式によっております。

(未適用の会計基準等)

1. 収益認識に関する会計基準等

- ・「収益認識に関する会計基準」(企業会計基準第29号 平成30年3月30日 企業会計基準委員会)
- ・「収益認識に関する会計基準の適用指針」(企業会計基準適用指針第30号 平成30年3月30日 企業会計基準委員会)

(1) 概要

国際会計基準審議会(IASB)及び米国財務会計基準審議会(FASB)は、共同して収益認識に関する包括的な会計基準の開発を行い、2014年5月に「顧客との契約から生じる収益」(IASBにおいてはIFRS第15号、FASBにおいてはTopic606)を公表しており、IFRS第15号は2018年1月1日以後開始する事業年度から、Topic606は2017年12月15日より後に開始する事業年度から適用される状況を踏まえ、企業会計基準委員会において、収益認識に関する包括的な会計基準が開発され、適用指針と合わせて公表されたものです。

企業会計基準委員会の収益認識に関する会計基準の開発にあたっての基本的な方針として、IFRS第15号と整合性を図る便益の1つである財務諸表間の比較可能性の観点から、IFRS第15号の基本的な原則を取り入れることを出発点とし、会計基準を定めることとされ、また、これまで我が国で行われてきた実務等に配慮すべき項目がある場合には、比較可能性を損なわせない範囲で代替的な取扱いを追加することとされております。

(2) 適用予定日

2022年3月期の期首からの適用を予定しております。

(3) 当該会計基準等の適用による影響

「収益認識に関する会計基準」等の適用による連結財務諸表に与える影響額については、現時点で評価中であります。

(表示方法の変更)

(連結キャッシュ・フロー計算書)

前連結会計年度において、「投資活動によるキャッシュ・フロー」の「その他」に記載しておりました「投資事業組合からの分配による収入」は、金額的重要性が増したため、当連結会計年度より独立掲記しております。この表示方法の変更を反映させるため、前連結会計年度の連結財務諸表の組替えを行っております。

この結果、前連結会計年度の「投資活動によるキャッシュ・フロー」において、「その他」に表示しておりました△55,334千円は、「投資事業組合からの分配による収入」24,997千円、「その他」△80,331千円として組替えております。

(連結貸借対照表関係)

※1 非連結子会社及び関連会社に対するものは、次のとおりであります。

	前連結会計年度 (2017年3月31日)	当連結会計年度 (2018年3月31日)
投資有価証券(株式)	171,437千円	130,073千円
出資金	98,252	88,419

2 当社及び連結子会社は、運転資金の効率的な調達を行うため取引銀行と当座貸越契約を締結しております。当座貸越契約に係る借入未実行残高は次のとおりであります。

	前連結会計年度 (2017年3月31日)	当連結会計年度 (2018年3月31日)
当座貸越極度額	300,000千円	300,000千円
借入実行残高	—	—
差引額	300,000千円	300,000千円

※3 たな卸資産の内訳は、次のとおりであります。

	前連結会計年度 (2017年3月31日)	当連結会計年度 (2018年3月31日)
商品及び製品	2,435千円	170千円
原材料及び貯蔵品	5,275	4,730

(連結損益計算書関係)

※1 販売費及び一般管理費のうち主要な費目及び金額は次のとおりであります。

	前連結会計年度 (自 2016年4月1日 至 2017年3月31日)	当連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)
給料及び手当	3,155,720千円	3,259,977千円
貸倒引当金繰入額	81,032	35,308

※2 一般管理費に含まれる研究開発費の総額

	前連結会計年度 (自 2016年4月1日 至 2017年3月31日)	当連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)
研究開発費	155,139千円	71,982千円

※3 減損損失

前連結会計年度(自 2016年4月1日 至 2017年3月31日)

当連結会計年度において、当社グループは以下の資産グループについて減損損失を計上しております。

(1) 減損損失を認識した資産グループの概要

会社名	場所	用途	資産の種類
ADWAYS INNOVATIONS SINGAPORE PTE. LTD.	シンガポール共和国	事業用資産	ソフトウェア
ADWAYS INNOVATIONS INDIA PVT. LTD.	インド共和国	事業用資産	ソフトウェア
		その他	のれん

(2) 減損損失の認識に至った経緯

在外連結子会社のソフトウェア及びのれんについて、当初想定した収益が見込めなくなったため、減損損失を認識しております。

(3) 減損損失の金額

資産の種類	金額（千円）
ソフトウェア	7,942
のれん	126,624
計	134,566

(4) 資産のグルーピングの方法

当社グループは、事業単位を基準として資産のグルーピングを行っております。

(5) 回収可能価額の算定方法

回収可能価額は、使用価値により測定しております。使用価値は将来キャッシュ・フローがマイナスの場合、回収可能価額を零として評価しております。

当連結会計年度（自 2017年4月1日 至 2018年3月31日）

当連結会計年度において、当社グループは以下の資産グループについて減損損失を計上しております。

(1) 減損損失を認識した資産グループの概要

会社名	場所	用途	資産の種類
Mist Technologies 株式会社	東京都新宿区	その他	のれん

(2) 減損損失の認識に至った経緯

国内連結子会社の株式取得時に発生したのれんについて、事業計画の見直しを行ったところ、当初想定した収益が見込めなくなったため、帳簿価額を回収可能価額まで減額し、当該減少額を減損損失として特別損失に計上しました。

(3) 減損損失の金額

資産の種類	金額（千円）
のれん	65,819
計	65,819

(4) 資産のグルーピングの方法

当社グループは、事業単位を基準として資産のグルーピングを行っております。

(5) 回収可能価額の算定方法

回収可能価額は、使用価値により測定しております。

(連結包括利益計算書関係)

※ 1 その他の包括利益に係る組替調整額及び税効果額

	前連結会計年度 (自 2016年4月1日 至 2017年3月31日)	当連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)
その他有価証券評価差額金：		
当期発生額	404,035千円	27,453千円
組替調整額	—	—
税効果調整前	404,035	27,453
税効果額	123,715	8,406
その他有価証券評価差額金	280,319	19,047
為替換算調整勘定：		
当期発生額	△121,110	49,539
為替換算調整勘定	△121,110	49,539
その他の包括利益合計	159,209	68,587

(連結株主資本等変動計算書関係)

前連結会計年度 (自 2016年4月1日 至 2017年3月31日)

1. 発行済株式の種類及び総数並びに自己株式の種類及び株式数に関する事項

	当連結会計年度期首 株式数 (株)	当連結会計年度増加 株式数 (株)	当連結会計年度減少 株式数 (株)	当連結会計年度末 株式数 (株)
発行済株式				
普通株式	41,583,500	—	—	41,583,500
合計	41,583,500	—	—	41,583,500
自己株式				
普通株式	857,600	1,980,100	—	2,837,700
合計	857,600	1,980,100	—	2,837,700

(注) 普通株式の自己株式の株式数の増加1,980,100株は、取締役会決議による自己株式の取得による増加であります。

2. 新株予約権及び自己新株予約権に関する事項

区分	新株予約権の内訳	新株予約 権の目的 となる株 式の種類	新株予約権の目的となる株式の数(株)				当連結会計 年度末残高 (千円)
			当連結会計 年度期首	当連結会計 年度増加	当連結会計 年度減少	当連結会計 年度末	
提出会社 (親会社)	ストックオプションとし ての新株予約権	普通株式	—	—	—	—	5,447
	第10回新株予約権 (第三者割当て)	普通株式	4,625,300	—	4,625,300	—	—
合計			4,625,300	—	4,625,300	—	5,447

(注) 新株予約権の減少4,625,300株は、新株予約権の消却によるものであります。

3. 配当に関する事項

①配当金支払額

決議	株式の種類	配当金の総額	配当の原資	1株当たり 配当額	基準日	効力発生日
2016年6月28日 定時株主総会	普通株式	95,705千円	利益剰余金	2.35円	2016年3月31日	2016年6月29日

②基準日が当連結会計年度に属する配当のうち、配当の効力発生日が翌連結会計年度となるもの

決議	株式の種類	配当金の総額	配当の原資	1株当たり 配当額	基準日	効力発生日
2017年6月23日 定時株主総会	普通株式	91,060千円	利益剰余金	2.35円	2017年3月31日	2017年6月26日

当連結会計年度（自 2017年4月1日 至 2018年3月31日）

1. 発行済株式の種類及び総数並びに自己株式の種類及び株式数に関する事項

	当連結会計年度期首 株式数（株）	当連結会計年度増加 株式数（株）	当連結会計年度減少 株式数（株）	当連結会計年度末 株式数（株）
発行済株式				
普通株式（注） 1	41,583,500	5,000	—	41,588,500
合計	41,583,500	5,000	—	41,588,500
自己株式				
普通株式（注） 2	2,837,700	100	—	2,837,800
合計	2,837,700	100	—	2,837,800

（注） 1. 普通株式の増加5,000株は、新株予約権の権利行使による増加であります。

2. 普通株式の自己株式の株式数の増加100株は、単元未満株式の買取りによる増加であります。

2. 新株予約権及び自己新株予約権に関する事項

区分	新株予約権の内訳	新株予約 権の目的 となる株 式の種類	新株予約権の目的となる株式の数(株)				当連結会計 年度末残高 (千円)
			当連結会計 年度期首	当連結会計 年度増加	当連結会計 年度減少	当連結会計 年度末	
提出会社 (親会社)	ストックオプションとし ての新株予約権	普通株式	—	—	—	—	5,034
合計			—	—	—	—	5,034

3. 配当に関する事項

①配当金支払額

決議	株式の種類	配当金の総額	配当の原資	1株当たり 配当額	基準日	効力発生日
2017年6月23日 定時株主総会	普通株式	91,060千円	利益剰余金	2.35円	2017年3月31日	2017年6月26日

②基準日が当連結会計年度に属する配当のうち、配当の効力発生日が翌連結会計年度となるもの

決議	株式の種類	配当金の総額	配当の原資	1株当たり 配当額	基準日	効力発生日
2018年6月27日 定時株主総会	普通株式	91,064千円	利益剰余金	2.35円	2018年3月31日	2018年6月28日

(連結キャッシュ・フロー計算書関係)

※1 現金及び現金同等物の期末残高と連結貸借対照表に掲記されている科目の金額との関係

	前連結会計年度 (自 2016年4月1日 至 2017年3月31日)	当連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)
現金及び預金勘定	8,853,650千円	9,491,272千円
預入期間が3か月を超える定期預金	△536,320	—
現金及び現金同等物	8,317,330	9,491,272

※2 株式の取得により新たに連結子会社となった会社の資産及び負債の主な内訳

前連結会計年度(自2016年4月1日 至2017年3月31日)

株式の取得により新たにMist Technologies株式会社を連結したことに伴う連結開始時の資産及び負債の内訳並びにMist Technologies株式会社株式の取得価額とMist Technologies株式会社取得のための支出(純額)との関係は次のとおりであります。

流動資産	12,688 千円
固定資産	2,036
のれん	214,216
流動負債	△2,759
非支配株主持分	△3,948
株式の取得価額	222,233
現金及び現金同等物	△12,132
差引：取得のための支出	210,100

当連結会計年度(自2017年4月1日 至2018年3月31日)

該当事項はありません。

※3 事業の譲受により増加した資産及び負債の主な内訳

前連結会計年度(自2016年4月1日 至2017年3月31日)

当社連結子会社であるADWAYS INNOVATIONS INDIA PVT. LTD. がポイントアプリ事業を譲受けしたことに伴い増加した資産、負債及び当該事業の譲受対価と事業譲受による支出(純額)との関係は次のとおりであります。

固定資産	6,729 千円
のれん	148,970
事業譲受の対価	155,700
差引：事業譲受による支出	155,700

当連結会計年度(自2017年4月1日 至2018年3月31日)

当社連結子会社であるBrasta株式会社がインフルエンサーを起用したコラボレーション事業を譲受けしたことに伴い増加した資産、負債及び当該事業の譲受対価と事業譲受による支出(純額)との関係は次のとおりであります。

のれん	10,000 千円
事業譲受の対価	10,000
差引：事業譲受による支出	10,000

4 重要な非資金取引

(1) 新株予約権に関するもの

	前連結会計年度 (自 2016年4月1日 至 2017年3月31日)	当連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)
新株予約権の行使による資本金増加額	一千円	206千円
新株予約権の行使による資本準備金増加額	一千円	206千円

(2) 新たに計上した資産除去債務の額

	前連結会計年度 (自 2016年4月1日 至 2017年3月31日)	当連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)
資産除去債務の額	一千円	22,907千円

(リース取引関係)

1. オペレーティング・リース取引

オペレーティング・リース取引のうち解約不能のものに係る未経過リース料

(単位：千円)

	前連結会計年度 (2017年3月31日)	当連結会計年度 (2018年3月31日)
1 年内	368,882	364,440
1 年超	607,221	383,054
合計	976,103	747,495

(金融商品関係)

1. 金融商品の状況に関する事項

(1) 金融商品に対する取組方針

当社グループでは、流動性を確保しながら、資金の内、運転資金を除く余剰資金に対して、事業会社本来の目的を逸脱しない範囲に限定し、原則として預貯金のみの運用に限定し、投機的な取引は行わない方針であります。

その他の金融商品取引（信用取引、債券先物取引及び商品先物取引等）については、原則行わない方針ではありますが、今後の海外事業の拡大により、先物為替予約等をヘッジ目的で利用する可能性があります。

(2) 金融商品の内容及びそのリスク並びにリスク管理体制

営業債権である売掛金は、顧客の信用リスクに晒されています。当該リスクに関しては、取引先ごとに与信管理を徹底し、回収期日や残高を定期的に管理することで、財務状況等の悪化等による回収懸念の早期把握や軽減を図っております。

投資有価証券は、業務上関係を有する企業の株式であります。主として非上場株式であるため、時価を把握することが極めて困難と認められるものについては、定期的に発行企業の財務状況等を把握することで減損懸念の早期把握や軽減を図っております。

営業債務である支払手形及び買掛金は、そのほとんどが短期間で決済されるものであります。

2. 金融商品の時価等に関する事項

前連結会計年度（2017年3月31日）

2017年3月31日における連結貸借対照表計上額、時価及びこれらの差額については、次のとおりであります。

	連結貸借対照表計上額 (千円)	時価 (千円)	差額 (千円)
(1)現金及び預金	8,853,650	8,853,650	—
(2)受取手形及び 売掛金 貸倒引当金	6,360,872 △230,698		
受取手形及び 売掛金（純額）	6,130,174	6,130,174	—
(3)投資有価証券 その他有価証券	554,738	554,738	—
資産計	15,538,562	15,538,562	—
支払手形及び 買掛金	5,284,414	5,284,414	—
負債計	5,284,414	5,284,414	—

(注1) 金融商品の時価の算定方法に関する事項

資産

(1)現金及び預金、(2)受取手形及び売掛金

これらは短期間で決済されるため、時価は帳簿価額にほぼ等しいことから、当該帳簿価額によっております。

(3)投資有価証券

これらの時価について、株式は取引所の価格によっております。

負債

支払手形及び買掛金

これらは短期間で決済されるため、時価は帳簿価額にほぼ等しいことから、当該帳簿価額によっております。

当連結会計年度（2018年3月31日）

2018年3月31日における連結貸借対照表計上額、時価及びこれらの差額については、次のとおりであります。

	連結貸借対照表計上額 (千円)	時価 (千円)	差額 (千円)
(1)現金及び預金	9,491,272	9,491,272	—
(2)受取手形及び 売掛金 貸倒引当金	5,543,958 △295,581		
受取手形及び 売掛金（純額）	5,248,377	5,248,377	—
(3)投資有価証券 その他有価証券	568,627	568,627	—
資産計	15,308,277	15,308,277	—
支払手形及び 買掛金	5,204,945	5,204,945	—
負債計	5,204,945	5,204,945	—

(注1) 金融商品の時価の算定方法に関する事項

資産

(1)現金及び預金、(2)受取手形及び売掛金

これらは短期間で決済されるため、時価は帳簿価額にほぼ等しいことから、当該帳簿価額によっております。

(3)投資有価証券

これらの時価について、株式は取引所の価格によっております。

負債

支払手形及び買掛金

これらは短期間で決済されるため、時価は帳簿価額にほぼ等しいことから、当該帳簿価額によっております。

(注2) 時価を把握することが極めて困難と認められる金融商品

(単位：千円)

区分	前連結会計年度 (2017年3月31日)	当連結会計年度 (2018年3月31日)
非上場株式	483,604	376,231
非上場転換社債	37,400	35,423
非連結子会社及び関連会社株式	171,437	130,073
投資事業組合出資分	408,035	454,177

これらについては、市場価格がなく、時価を把握することが極めて困難と認められることから、「(3) 投資有価証券」には含めておりません。

(注3) 金銭債権及び満期のある有価証券の連結決算日後の償還予定額

前連結会計年度 (2017年3月31日)

	1年以内 (千円)	1年超5年以内 (千円)	5年超10年以内 (千円)	10年超 (千円)
現金及び預金	8,853,650	—	—	—
受取手形及び売掛金	6,360,872	—	—	—
合計	15,214,523	—	—	—

当連結会計年度 (2018年3月31日)

	1年以内 (千円)	1年超5年以内 (千円)	5年超10年以内 (千円)	10年超 (千円)
現金及び預金	9,491,272	—	—	—
受取手形及び売掛金	5,543,958	—	—	—
合計	15,035,231	—	—	—

(有価証券関係)

1. 売買目的有価証券

前連結会計年度 (2017年3月31日)

該当事項はありません。

当連結会計年度 (2018年3月31日)

該当事項はありません。

2. 満期保有目的の債券

前連結会計年度 (2017年3月31日)

該当事項はありません。

当連結会計年度 (2018年3月31日)

該当事項はありません。

3. その他有価証券

前連結会計年度（2017年3月31日）

	種類	連結貸借対照表計上額（千円）	取得原価（千円）	差額（千円）
連結貸借対照表計上額が取得原価を超えるもの	(1) 株式	554,738	107,437	447,300
	(2) 債券			
	① 国債・地方債等	—	—	—
	② 社債	—	—	—
	③ その他	—	—	—
	(3) その他	—	—	—
	小計	554,738	107,437	447,300
連結貸借対照表計上額が取得原価を超えないもの	(1) 株式	—	—	—
	(2) 債券			
	① 国債・地方債等	—	—	—
	② 社債	—	—	—
	③ その他	—	—	—
	(3) その他	—	—	—
	小計	—	—	—
合計		554,738	107,437	447,300

（注）非上場株式（連結貸借対照表価額483,604千円）及び非上場転換社債（連結貸借対照表価額37,400千円）、投資事業組合出資分（連結貸借対照表価額408,035千円）については市場価格がなく、時価を把握することが極めて困難と認められることから上表には含めておりません。

当連結会計年度（2018年3月31日）

	種類	連結貸借対照表計上額（千円）	取得原価（千円）	差額（千円）
連結貸借対照表計上額が取得原価を超えるもの	(1) 株式	568,627	107,437	461,190
	(2) 債券			
	① 国債・地方債等	—	—	—
	② 社債	—	—	—
	③ その他	—	—	—
	(3) その他	—	—	—
	小計	568,627	107,437	461,190
連結貸借対照表計上額が取得原価を超えないもの	(1) 株式	—	—	—
	(2) 債券	—	—	—
	① 国債・地方債等	—	—	—
	② 社債	—	—	—
	③ その他	—	—	—
	(3) その他	—	—	—
	小計	—	—	—
合計		568,627	107,437	461,190

（注）非上場株式（連結貸借対照表価額376,231千円）及び非上場転換社債（連結貸借対照表価額35,423千円）、投資事業組合出資分（連結貸借対照表価額454,177千円）については市場価格がなく、時価を把握することが極めて困難と認められることから上表には含めておりません。

4. 売却したその他有価証券

前連結会計年度（自 2016年4月1日 至 2017年3月31日）

種類	売却額（千円）	売却益の合計額（千円）	売却損の合計額（千円）
(1) 株式	53,586	51,724	—
(2) 債券			
① 国債・地方債等	—	—	—
② 社債	—	—	—
③ その他	—	—	—
(3) その他	—	—	—
合計	53,586	51,724	—

当連結会計年度（自 2017年4月1日 至 2018年3月31日）

種類	売却額（千円）	売却益の合計額（千円）	売却損の合計額（千円）
(1) 株式	22,268	19,480	—
(2) 債券			
① 国債・地方債等	—	—	—
② 社債	—	—	—
③ その他	—	—	—
(3) その他	—	—	—
合計	22,268	19,480	—

5. 減損処理を行った有価証券

前連結会計年度において、その他有価証券について285,005千円の減損処理を行っております。

当連結会計年度において、その他有価証券について265,017千円の減損処理を行っております。

なお、減損処理にあたっては、直近の財務諸表における1株当たり純資産額が取得原価に比し、50%以上下落した場合は、原則減損としますが、個別に回復可能性を判断し、最終的に減損処理の要否を決定しております。

（デリバティブ取引関係）

該当事項はありません。

（退職給付関係）

該当事項はありません。

（ストック・オプション等関係）

1. スtock・オプションに係る費用計上額及び科目名

前連結会計年度（自2016年4月1日 至2017年3月31日）

該当事項はありません。

当連結会計年度（自2017年4月1日 至2018年3月31日）

該当事項はありません。

2. スtock・オプションの内容、規模及びその変動状況

(1) スtock・オプションの内容

	株式会社アドウェイズ 2013年1月31日 第7回ストック・オプション	株式会社アドウェイズ 2013年1月31日 第8回ストック・オプション
付与対象者の区分及び数	取締役 2名 監査役 3名	従業員 18名
株式の種類別のストック・オプション数（注）	普通株式 150,000株	普通株式 405,000株
付与日	2013年2月18日	2013年2月18日
権利確定条件	権利確定条件は付されていません。	権利確定条件は付されていません。
対象勤務期間	対象勤務期間の定めはありません。	対象勤務期間の定めはありません。
権利行使期間	2015年2月19日～2023年1月31日	2015年2月19日～2018年2月18日

（注）2013年10月1日をもって普通株式1株から500株の株式分割を行っており、分割後の株式数に換算しております。

(2) スtock・オプションの規模及びその変動状況

当連結会計年度（2018年3月期）において存在したStock・オプションを対象とし、Stock・オプションの数については、株式数に換算して記載しております。

① Stock・オプションの数

	株式会社アドウェイズ 2013年2月18日 第7回Stock・オプション	株式会社アドウェイズ 2013年2月18日 第8回Stock・オプション
権利確定前 (株)		
前連結会計年度末	—	—
付与	—	—
失効	—	—
権利確定	—	—
未確定残	—	—
権利確定後 (株)		
前連結会計年度末	39,000	5,000
権利確定	—	—
権利行使	—	5,000
失効	—	—
未行使残	39,000	—

(注) 2013年10月1日をもって普通株式1株から500株の株式分割を行っており、分割後の株式数に換算しております。

② 単価情報

	株式会社アドウェイズ 2013年2月18日 第7回Stock・オプション	株式会社アドウェイズ 2013年2月18日 第8回Stock・オプション
権利行使価格 (円) (注)	196	196
行使時平均株価 (円)	—	471
公正な評価単価 (付与日) (円)	129.09	82.658

(注) 2013年10月1日をもって普通株式1株から500株の株式分割を行っており、権利行使価格及び公正な評価基準につきましては、分割による調整後の1株当たりの価格を記載しております。

3. 連結会計年度に付与されたStock・オプションの公正な評価単価の見積方法

該当事項はありません。

4. Stock・オプションの権利確定数の見積方法

基本的には、将来の失効数は合理的な見積りは困難であるため、実数の失効数のみ反映させる方法を採用しております。

(税効果会計関係)

1. 繰延税金資産及び繰延税金負債の発生の主な原因別の内訳

	前連結会計年度 (2017年3月31日)	当連結会計年度 (2018年3月31日)
繰延税金資産		
貸倒引当金	108,387千円	134,244千円
投資有価証券評価損	135,486	199,216
関係会社株式評価損	60,420	15,154
減価償却	148,151	89,404
未払事業税	10,502	5,659
未払賃借料	954	3,555
資産除去債務	28,056	32,040
繰越欠損金	583,304	651,193
その他	6,256	6,469
繰延税金資産小計	1,081,520	1,136,938
評価性引当額	△913,112	△999,490
繰延税金資産合計	168,408	137,448
繰延税金負債		
資産除去債務に対応する除去費用	△13,898	△13,825
その他有価証券評価差額金	△141,412	△149,819
未処分利益	△1,240	△39
繰延税金負債合計	△156,551	△163,683
繰延税金資産又は繰延税金負債(△)の純額	11,856	△26,235

(注) 前連結会計年度及び当連結会計年度における繰延税金資産又は繰延税金負債の純額は、連結貸借対照表の以下の項目に含まれております。

	前連結会計年度 (2017年3月31日)	当連結会計年度 (2018年3月31日)
流動資産－繰延税金資産	25,352千円	20,108千円
固定資産－繰延税金資産	—	—
流動負債－その他	△1,240	△39
固定負債－繰延税金負債	△12,255	△46,305

2. 法定実効税率と税効果会計適用後の法人税等の負担率との間に重要な差異があるときの、当該差異の原因となった主要な項目別の内訳

	前連結会計年度 (2017年3月31日)	当連結会計年度 (2018年3月31日)
法定実効税率	—	30.9%
(調整)		
交際費等の永久差異	—	4.3
受取配当金等永久差異	—	△16.5
住民税均等割	—	6.1
前期確定申告差異	—	5.0
評価性引当額の増減	—	42.6
海外子会社税率差異	—	△7.0
持分法による投資損益	—	3.9
のれん償却額	—	5.8
のれん減損損失	—	10.0
関係会社株式売却損益の連結修正	—	4.9
連結処理に伴う損益調整	—	0.8
その他	—	1.4
税効果会計適用後の法人税等の負担率	—	92.2

前連結会計年度は、税金等調整前当期純損失を計上しているため、記載を省略しております。

(企業結合等関係)

当連結会計年度において行われた企業結合等につきましては、重要性が乏しいため、記載を省略しております。

(資産除去債務関係)

資産除去債務のうち連結貸借対照表に計上しているもの

イ 当該資産除去債務の概要

建物の不動産賃貸借契約に伴う原状回復義務等であります。

ロ 当該資産除去債務の金額の算定方法

使用見込期間を取得から1年～10年と見積り、割引率は0.099%～1.349%を使用して資産除去債務の金額を計算しております。

ハ 当該資産除去債務の総額の増減

	前連結会計年度 (自 2016年4月1日 至 2017年3月31日)	当連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)
期首残高	107,641千円	106,698千円
有形固定資産の取得に伴う増加額	—	22,907
時の経過による調整額	478	484
資産除去債務の履行による減少額	—	15,570
その他増減額(△は減少)	△1,422	486
期末残高	106,698	115,006

(賃貸等不動産関係)

該当事項はありません。

(セグメント情報等)

【セグメント情報】

1. 報告セグメントの概要

当社グループの報告セグメントは、当社及び子会社の構成単位のうち分離された財務情報が入手可能であり、取締役会が、経営資源の配分の決定及び業績を評価するために、定期的に検討を行う対象となっているものであります。

「広告事業」は、主にインターネット通信を介した広告事業等、「アプリ・メディア事業」は、スマートフォンアプリの開発・運営とメディアの運営等、「海外事業」は、海外における総合的なインターネットマーケティングサービス及び海外を主たるマーケットとして想定しているプロダクトの開発や運営、並びにサービスの提供を行っております。

2. 報告セグメントごとの売上高、利益又は損失、資産、負債その他の項目の金額の算定方法

報告されている事業セグメントの会計処理の方法は、「連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項」における記載と概ね同一であります。

報告セグメントの利益は、営業利益ベースの数値であります。セグメント間の内部収益及び振替高は市場実勢価格に基づいております。

3. 報告セグメントごとの売上高、利益又は損失、資産、負債その他の項目の金額に関する情報
前連結会計年度（自2016年4月1日 至2017年3月31日）

（単位：千円）

	報告セグメント				その他 （注）	合計
	広告事業	アプリ・ メディア 事業	海外事業	計		
売上高						
外部顧客に対する売上高	35,690,633	697,098	5,860,636	42,248,368	81,109	42,329,478
セグメント間の内部売上高又は振替高	562,399	912	1,241,616	1,804,928	32,270	1,837,198
計	36,253,033	698,010	7,102,252	44,053,296	113,379	44,166,676
セグメント利益又は損失（△）	2,975,448	△74,301	△830,325	2,070,821	△273,802	1,797,019
セグメント資産	5,300,520	633,196	3,333,324	9,267,040	296,755	9,563,796
その他の項目						
減価償却費	35,938	2,793	56,613	95,345	2,358	97,703
のれんの償却額	—	4,138	57,664	61,802	—	61,802
有形固定資産及び無形固定資産の増加額	84,245	12,100	28,335	124,680	1,183	125,864

当連結会計年度（自2017年4月1日 至2018年3月31日）

（単位：千円）

	報告セグメント				その他 （注）	合計
	広告事業	アプリ・ メディア 事業	海外事業	計		
売上高						
外部顧客に対する売上高	34,684,098	686,643	6,117,460	41,488,203	13,134	41,501,338
セグメント間の内部売上高又は振替高	833,629	5,540	1,334,000	2,173,170	85,772	2,258,942
計	35,517,728	692,184	7,451,461	43,661,374	98,906	43,760,281
セグメント利益又は損失（△）	2,202,461	△191,840	△130,605	1,880,015	△237,061	1,642,954
セグメント資産	4,644,935	517,997	3,186,347	8,349,279	230,702	8,579,982
その他の項目						
減価償却費	48,218	4,248	38,863	91,330	6,120	97,450
のれんの償却額	499	—	38,090	38,590	—	38,590
有形固定資産及び無形固定資産の増加額	124,007	16,180	71,699	211,887	24,802	236,690

（注）「その他」の区分は、報告セグメントに含まれない事業セグメントであり、新規事業等を含んでおります。

4. 報告セグメント合計額と連結財務諸表計上額との差額及び当該差額の主な内容（差異調整に関する事項）
売上高

（単位：千円）

	前連結会計年度	当連結会計年度
報告セグメント計	44,053,296	43,661,374
「その他」の区分の売上高	113,379	98,906
セグメント間取引消去	△1,837,198	△2,258,942
連結財務諸表の売上高	42,329,478	41,501,338

セグメント利益

(単位：千円)

	前連結会計年度	当連結会計年度
報告セグメント計	2,070,821	1,880,015
「その他」の区分の利益	△273,802	△237,061
セグメント間取引消去	—	△3,658
全社費用（注）	△1,481,326	△1,339,949
連結財務諸表の営業利益	315,693	299,346

（注）全社費用は、各報告セグメントに配分していない営業費用であり、主に管理部門に係る費用であります。

セグメント資産

(単位：千円)

	前連結会計年度	当連結会計年度
報告セグメント計	9,267,040	8,349,279
「その他」の区分の資産	296,755	230,702
全社資産（注）	8,752,984	9,341,933
連結財務諸表の資産	18,316,780	17,921,916

（注）全社資産は、各報告セグメントに帰属しない資産であり、主に親会社での余資運用資金（現金及び預金）及び長期投資資金（投資有価証券）等であります。

その他の項目

(単位：千円)

その他の項目	報告セグメント計		その他		調整額		連結財務諸表計上額	
	前連結 会計年度	当連結 会計年度	前連結 会計年度	当連結 会計年度	前連結 会計年度	当連結 会計年度	前連結 会計年度	当連結 会計年度
減価償却費	95,345	91,330	2,358	6,120	46,052	44,854	143,756	142,305
のれんの償却額	61,802	38,590	—	—	—	—	61,802	38,590
有形固定資産及び無形固定資産の増加額（注）	124,680	211,887	1,183	24,802	11,086	84,601	136,950	321,291

（注）有形固定資産及び無形固定資産の増加額の調整額は、主に親会社の工具、器具及び備品の増加額であります。

【関連情報】

前連結会計年度（自2016年4月1日 至2017年3月31日）

1. 製品及びサービスごとの情報

セグメント情報に同様の情報を開示しているため、記載を省略しております。

2. 地域ごとの情報

(1) 売上高

(単位：千円)

日本	アジア	北米	欧州	合計
37,226,509	4,537,278	488,862	76,827	42,329,478

(2) 有形固定資産

(単位：千円)

日本	アジア	北米	合計
209,750	65,450	772	275,973

3. 主要な顧客ごとの情報

外部顧客への売上高のうち連結損益計算書の売上高の10%以上を占める相手先はないため、記載を省略しております。

当連結会計年度（自2017年4月1日 至2018年3月31日）

1. 製品及びサービスごとの情報

セグメント情報に同様の情報を開示しているため、記載を省略しております。

2. 地域ごとの情報

(1) 売上高

(単位：千円)

日本	アジア	北米	欧州	合計
36,539,401	4,710,358	201,356	50,221	41,501,338

(2) 有形固定資産

(単位：千円)

日本	アジア	北米	合計
204,655	94,975	-	299,630

3. 主要な顧客ごとの情報

外部顧客への売上高のうち連結損益計算書の売上高の10%以上を占める相手先はないため、記載を省略しております。

【報告セグメントごとの固定資産の減損損失に関する情報】

前連結会計年度（自2016年4月1日 至2017年3月31日）

(単位：千円)

	広告事業	アプリ・メディア事業	海外事業	その他	全社・消去	合計
減損損失	-	-	134,566	-	-	134,566

当連結会計年度（自2017年4月1日 至2018年3月31日）

(単位：千円)

	広告事業	アプリ・メディア事業	海外事業	その他	全社・消去	合計
減損損失	-	-	65,819	-	-	65,819

【報告セグメントごとののれんの償却額及び未償却残高に関する情報】

前連結会計年度（自2016年4月1日 至2017年3月31日）

(単位：千円)

	広告事業	アプリ・メディア事業	海外事業	その他	全社・消去	合計
当期末残高	-	-	196,269	-	-	196,269

(注) のれんの償却額は、セグメント情報に同様の情報を開示しているため、記載を省略しております。

当連結会計年度（自2017年4月1日 至2018年3月31日）

(単位：千円)

	広告事業	アプリ・メディア事業	海外事業	その他	全社・消去	合計
当期末残高	9,500	-	92,359	-	-	101,859

(注) のれんの償却額は、セグメント情報に同様の情報を開示しているため、記載を省略しております。

【報告セグメントごとの負ののれん発生益に関する情報】

前連結会計年度（自2016年4月1日 至2017年3月31日）

該当事項はありません。

当連結会計年度（自2017年4月1日 至2018年3月31日）

該当事項はありません。

【関連当事者情報】

関連当事者との取引

前連結会計年度（自2016年4月1日 至2017年3月31日）

該当事項はありません。

当連結会計年度（自2017年4月1日 至2018年3月31日）

該当事項はありません。

（開示対象特別目的会社関係）

該当事項はありません。

（1株当たり情報）

	前連結会計年度 (自 2016年4月1日 至 2017年3月31日)	当連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)
1株当たり純資産額	281円92銭	281円05銭
1株当たり当期純利益金額又は1株当たり当期純損失金額 (△)	△11円11銭	0円26銭
潜在株式調整後1株当たり当期純利益金額	—	0円26銭

（注） 1. 前連結会計年度の潜在株式調整後1株当たり当期純利益金額については、潜在株式は存在するものの1株当たり当期純損失金額であるため記載しておりません。

2. 1株当たり当期純利益金額又は1株当たり当期純損失金額及び潜在株式調整後1株当たり当期純利益金額の算定上の基礎は、以下のとおりであります。

	前連結会計年度 (自 2016年4月1日 至 2017年3月31日)	当連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)
1株当たり当期純利益金額又は1株当たり当期純損失金額 (△)		
親会社株主に帰属する当期純利益金額又は親会社株主に 帰属する当期純損失金額 (△) (千円)	△450,825	9,977
普通株主に帰属しない金額 (千円)	—	—
普通株式に係る親会社株主に帰属する当期純利益金額又は 親会社株主に帰属する当期純損失金額 (△) (千円)	△450,825	9,977
期中平均株式数 (株)	40,568,577	38,746,360
潜在株式調整後1株当たり当期純利益金額		
親会社株主に帰属する当期純利益調整額 (千円)	—	—
普通株式増加数 (株)	—	5,000
(うち新株予約権 (株))	(—)	(5,000)
希薄化効果を有しないため、潜在株式調整後1株当たり当 期純利益金額の算定に含めなかった潜在株式の概要	—	—

（重要な後発事象）

該当事項はありません。

⑤【連結附属明細表】

【社債明細表】

該当事項はありません。

【借入金等明細表】

該当事項はありません。

【資産除去債務明細表】

当連結会計年度期首及び当連結会計年度末における資産除去債務の金額が、当連結会計年度期首及び当連結会計年度末における負債及び純資産の合計額の100分の1以下であるため、連結財務諸表規則第92条の2の規定により記載を省略しております。

(2) 【その他】

当連結会計年度における四半期情報等

(累計期間)	第1四半期	第2四半期	第3四半期	当連結会計年度
売上高(千円)	10,694,332	21,261,963	30,332,184	41,501,338
税金等調整前四半期(当期)純利益金額又は税金等調整前四半期純損失金額(△)(千円)	43,479	166,834	△79,334	202,801
親会社株主に帰属する当期純利益金額又は親会社株主に帰属する四半期純損失金額(△)(千円)	△54,583	△3,768	△215,392	9,977
1株当たり当期純利益金額又は1株当たり四半期純損失金額(△)(円)	△1.41	△0.10	△5.56	0.26

(会計期間)	第1四半期	第2四半期	第3四半期	第4四半期
1株当たり四半期純利益額又は1株当たり四半期純損失金額(△)(円)	△1.41	1.31	△5.46	5.82

2 【財務諸表等】
 (1) 【財務諸表】
 ① 【貸借対照表】

(単位：千円)

	前事業年度 (2017年3月31日)	当事業年度 (2018年3月31日)
資産の部		
流動資産		
現金及び預金	6,420,119	7,056,920
売掛金	※1 5,098,045	※1 4,492,322
貯蔵品	5,206	4,721
前渡金	4,912	25,070
前払費用	80,940	66,775
未収収益	※1 2,479	※1 4,163
繰延税金資産	25,352	20,108
その他	※1 338,546	※1 275,181
貸倒引当金	△12,154	△5,743
流動資産合計	11,963,449	11,939,521
固定資産		
有形固定資産		
建物	117,364	120,162
工具、器具及び備品	73,130	66,357
有形固定資産合計	190,495	186,519
無形固定資産		
ソフトウェア	30,696	129,267
ソフトウェア仮勘定	68,923	94,078
商標権	631	529
無形固定資産合計	100,252	223,876
投資その他の資産		
投資有価証券	1,483,777	1,434,460
関係会社株式	1,039,416	810,127
関係会社出資金	770,016	704,226
長期貸付金	※1 150,578	※1 17,712
その他	366,685	376,466
貸倒引当金	△95,667	△120,511
投資その他の資産合計	3,714,805	3,222,481
固定資産合計	4,005,553	3,632,877
資産合計	15,969,003	15,572,399

(単位：千円)

	前事業年度 (2017年 3 月31 日)	当事業年度 (2018年 3 月31 日)
負債の部		
流動負債		
買掛金	※ 1 4, 517, 703	※ 1 4, 533, 074
未払金	※ 1 506, 486	※ 1 405, 550
未払法人税等	60, 235	—
未払消費税等	321, 994	68, 107
前受金	136, 186	69, 585
預り金	78, 184	115, 734
未払費用	5, 124	9, 573
その他	13, 027	14, 489
流動負債合計	5, 638, 942	5, 216, 115
固定負債		
資産除去債務	91, 614	101, 495
繰延税金負債	12, 255	46, 305
その他	66	4, 497
固定負債合計	103, 936	152, 298
負債合計	5, 742, 878	5, 368, 414
純資産の部		
株主資本		
資本金	1, 605, 258	1, 605, 955
資本剰余金		
資本準備金	595, 258	595, 955
その他資本剰余金	6, 804, 606	6, 804, 606
資本剰余金合計	7, 399, 865	7, 400, 562
利益剰余金		
その他利益剰余金		
繰越利益剰余金	2, 301, 660	2, 259, 541
利益剰余金合計	2, 301, 660	2, 259, 541
自己株式	△ 1, 406, 527	△ 1, 406, 575
株主資本合計	9, 900, 257	9, 859, 484
評価・換算差額等		
その他有価証券評価差額金	320, 418	339, 466
評価・換算差額等合計	320, 418	339, 466
新株予約権	5, 447	5, 034
純資産合計	10, 226, 124	10, 203, 984
負債純資産合計	15, 969, 003	15, 572, 399

②【損益計算書】

(単位：千円)

	前事業年度 (自 2016年4月1日 至 2017年3月31日)	当事業年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)
売上高	※1 36,347,006	※1 35,648,888
売上原価	※1 31,126,068	※1 30,830,070
売上総利益	5,220,938	4,818,818
販売費及び一般管理費	※1, ※2 4,291,537	※1, ※2 4,269,742
営業利益	929,400	549,075
営業外収益		
受取利息及び配当金	※1 10,300	※1 110,725
為替差益	10,330	20,781
投資有価証券評価益	-	186,611
その他	5,467	10,985
営業外収益合計	26,098	329,103
営業外費用		
貸倒引当金繰入額	39,353	19,783
投資有価証券評価損	10,196	-
その他	2,158	5,032
営業外費用合計	51,709	24,816
経常利益	903,790	853,362
特別利益		
投資有価証券売却益	51,724	19,480
関係会社株式売却益	6,051	0
特別利益合計	57,775	19,480
特別損失		
固定資産売却損	12	-
投資有価証券評価損	285,005	265,017
固定資産除却損	-	65
関係会社株式売却損	-	22,555
関係会社株式評価損	576,510	442,349
特別損失合計	861,529	729,987
税引前当期純利益	100,036	142,855
法人税、住民税及び事業税	206,506	63,035
法人税等調整額	32,752	30,887
法人税等合計	239,259	93,922
当期純利益又は当期純損失(△)	△139,222	48,933

【売上原価明細表】

		前事業年度 (自 2016年4月1日 至 2017年3月31日)		当事業年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	
区分	注記 番号	金額(千円)	構成比 (%)	金額(千円)	構成比 (%)
I 媒体費		29,965,399	96.3	29,360,361	95.2
II 労務費		517,811	1.6	724,527	2.4
III 外注費		-	-	-	-
IV 経費		642,857	2.1	745,182	2.4
当期総仕入高		31,126,068	100.0	30,830,070	100.0
当期売上原価		31,126,068		30,830,070	

(注) 原価計算の方法

システム開発の請負等については、実際個別原価計算によっております。

③【株主資本等変動計算書】

前事業年度（自 2016年4月1日 至 2017年3月31日）

（単位：千円）

	株主資本							
	資本金	資本剰余金			利益剰余金		自己株式	株主資本合計
		資本準備金	その他資本剰余金	資本剰余金合計	その他利益剰余金 繰越利益剰余金	利益剰余金合計		
当期首残高	1,605,258	595,258	6,804,606	7,399,865	2,536,589	2,536,589	△406,577	11,135,136
当期変動額								
当期純利益又は当期純損失 （△）					△139,222	△139,222		△139,222
剰余金の配当					△95,705	△95,705		△95,705
新株の発行（新株予約権の行使）								—
自己株式の取得							△999,950	△999,950
株主資本以外の項目の当期変動額（純額）								
当期変動額合計	—	—	—	—	△234,928	△234,928	△999,950	△1,234,878
当期末残高	1,605,258	595,258	6,804,606	7,399,865	2,301,660	2,301,660	△1,406,527	9,900,257

	評価・換算差額等		新株予約権	純資産合計
	その他有価証券評価差額金	評価・換算差額等合計		
当期首残高	40,099	40,099	60,951	11,236,186
当期変動額				
当期純利益又は当期純損失 （△）				△139,222
剰余金の配当				△95,705
新株の発行（新株予約権の行使）				—
自己株式の取得				△999,950
株主資本以外の項目の当期変動額（純額）	280,319	280,319	△55,503	224,816
当期変動額合計	280,319	280,319	△55,503	△1,010,062
当期末残高	320,418	320,418	5,447	10,226,124

当事業年度（自 2017年4月1日 至 2018年3月31日）

（単位：千円）

	株主資本							
	資本金	資本剰余金			利益剰余金		自己株式	株主資本合計
		資本準備金	その他資本剰余金	資本剰余金合計	その他利益剰余金 繰越利益剰余金	利益剰余金合計		
当期首残高	1,605,258	595,258	6,804,606	7,399,865	2,301,660	2,301,660	△1,406,527	9,900,257
当期変動額								
当期純利益又は当期純損失（△）					48,933	48,933		48,933
剰余金の配当					△91,052	△91,052		△91,052
新株の発行（新株予約権の行使）	696	696		696				1,393
自己株式の取得							△47	△47
株主資本以外の項目の当期変動額（純額）								
当期変動額合計	696	696	—	696	△42,119	△42,119	△47	△40,773
当期末残高	1,605,955	595,955	6,804,606	7,400,562	2,259,541	2,259,541	△1,406,575	9,859,484

	評価・換算差額等		新株予約権	純資産合計
	その他有価証券評価差額金	評価・換算差額等合計		
当期首残高	320,418	320,418	5,447	10,226,124
当期変動額				
当期純利益又は当期純損失（△）				48,933
剰余金の配当				△91,052
新株の発行（新株予約権の行使）				1,393
自己株式の取得				△47
株主資本以外の項目の当期変動額（純額）	19,047	19,047	△413	18,634
当期変動額合計	19,047	19,047	△413	△22,139
当期末残高	339,466	339,466	5,034	10,203,984

【注記事項】

(重要な会計方針)

1. 資産の評価基準及び評価方法

(1) 有価証券の評価基準及び評価方法

①子会社株式及び関連会社株式（子会社出資金及び関連会社出資金を含む）

移動平均法による原価法を採用しております。

②その他有価証券

時価のあるもの

事業年度末日の市場価格等に基づく時価法（評価差額は、全部純資産直入法により処理し、売却原価は、移動平均法により算定）によっております。

時価のないもの

移動平均法による原価法を採用しております。

当社が出資する投資事業組合等に対する出資持分の損益のうち当社に帰属する持分相当額については、純額で取り込み、営業外損益に計上するとともに「投資有価証券」を加減する処理を行っております。

(2) たな卸資産の評価基準及び評価方法

貯蔵品

先入先出法による原価法（貸借対照表価額は収益性の低下に基づく簿価切下げの方法により算定）を採用しております。

2. 固定資産の減価償却の方法

(1) 有形固定資産

定率法を採用しております。

ただし、2016年4月1日以降に取得した建物については、定額法を採用しております。

なお、主な耐用年数は以下のとおりであります。

建物 2～15年

工具、器具及び備品 3～10年

また、2007年3月31日以前に取得したものについては償却可能限度額まで償却が終了した翌年から5年間で均等償却する方法によっております。

(2) 無形固定資産

①自社利用のソフトウェアについては、社内における利用可能期間（3～5年）に基づく定額法によっております。

②のれんについては、その効果の及ぶ期間（5年）にわたって均等償却しております。

3. 繰延資産の処理方法

株式交付費、開業費

支出時に全額費用として処理しております。

4. 引当金の計上基準

貸倒引当金

債権の貸倒れによる損失に備えるため、一般債権については貸倒実績率により、貸倒懸念債権等特定の債権については個別に回収可能性を勘案し、回収不能見込額を計上しております。

5. その他財務諸表作成のための基本となる重要な事項

消費税等の会計処理

税抜方式によっております。

(貸借対照表関係)

※1 関係会社に対する金銭債権及び金銭債務

	前事業年度 (2017年3月31日)	当事業年度 (2018年3月31日)
短期金銭債権	450,442千円	444,213千円
長期金銭債権	131,954千円	10,223千円
短期金銭債務	238,408千円	132,721千円

- 2 当社は、運転資金の効率的な調達を行うため取引銀行1行と当座貸越契約を締結しております。当座貸越契約に係る借入未実行残高は次のとおりであります。

	前事業年度 (2017年3月31日)	当事業年度 (2018年3月31日)
当座貸越極度額	300,000千円	300,000千円
借入実行残高	—	—
差引額	300,000千円	300,000千円

(損益計算書関係)

※1 関係会社との取引高

	前事業年度 (自 2016年4月1日 至 2017年3月31日)	当事業年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)
営業取引による取引高		
売上高	672,836千円	917,009千円
営業費用	1,512,946千円	1,493,093千円
営業取引以外の取引による取引高	7,628千円	107,471千円

- ※2 販売費に属する費用のおおよその割合は前事業年度51%、当事業年度53%、一般管理費に属する費用のおおよその割合は前事業年度49%、当事業年度47%であります。

販売費及び一般管理費のうち主要な費目及び金額は次のとおりであります。

	前事業年度 (自 2016年4月1日 至 2017年3月31日)	当事業年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)
給料及び手当	2,043,567千円	2,133,458千円
支払手数料	464,813千円	421,022千円
減価償却費	66,457千円	83,595千円
貸倒引当金繰入額	20,814千円	16,681千円

(有価証券関係)

1. 子会社株式及び子会社出資金

前事業年度(2017年3月31日)

子会社株式及び関連会社株式並びに子会社出資金(貸借対照表計上額 関係会社株式1,039,416千円、関係会社出資金770,016千円)は、市場価格がなく、時価を把握することが極めて困難と認められることから、記載しておりません。

当事業年度(2018年3月31日)

子会社株式及び関連会社株式並びに子会社出資金(貸借対照表計上額 関係会社株式810,127千円、関係会社出資金704,226千円)は、市場価格がなく、時価を把握することが極めて困難と認められることから、記載しておりません。

(税効果会計関係)

1. 繰延税金資産及び繰延税金負債の発生の主な原因別の内訳

	前事業年度 (2017年3月31日)	当事業年度 (2018年3月31日)
繰延税金資産		
貸倒引当金	33,088千円	38,709千円
投資有価証券評価損	135,475	193,535
関係会社株式評価損	277,923	273,736
減価償却超過額	114,999	86,257
未払事業税	10,023	4,695
未払賃借料	117	—
資産除去債務	28,056	31,081
その他	5,753	10,431
繰延税金資産小計	605,437	638,448
評価性引当額	△437,029	△500,999
繰延税金資産合計	168,408	137,448
繰延税金負債		
資産除去債務に対応する除去費用	△13,898	△13,825
その他有価証券評価差額金	△141,412	△149,819
繰延税金負債合計	△155,311	△163,644
繰延税金資産又は繰延税金負債(△)の純額	13,097	△26,196

2. 法定実効税率と税効果会計適用後の法人税等の負担率との間に重要な差異があるときの、当該差異の原因となった主要な項目別の内訳

	前事業年度 (2017年3月31日)	当事業年度 (2018年3月31日)
法定実効税率	30.9%	30.9%
(調整)		
評価性引当額の増減	204.7	44.8
住民税均等割	10.3	7.1
所得拡大促進税制による税額控除	△15.3	△2.8
交際費等の永久差異	8.7	5.5
受取配当金等永久差異	△0.1	△21.2
その他	△0.0	1.5
税効果会計適用後の法人税等の負担率	239.2	65.7

(企業結合等関係)

連結財務諸表「注記事項(企業結合等関係)」に記載されているため、注記を省略しております。

(重要な後発事象)

該当事項はありません。

④【附属明細表】

【有形固定資産等明細表】

(単位：千円)

区分	資産の種類	当期首 残高	当期 増加額	当期 減少額	当期償却額	当期末 残高	減価償却 累計額
有形固定資産	建物	117,364	27,941	—	25,143	120,162	134,857
	工具、器具及び備品	73,130	35,357	401	41,729	66,357	208,396
	計	190,495	63,298	401	66,872	186,519	343,254
無形固定資産	商標権	631	—	—	102	529	—
	ソフトウェア	30,696	129,687	—	31,116	129,267	—
	ソフトウェア仮勘定	68,923	72,848	47,693	—	94,078	—
	計	100,252	202,536	47,693	31,218	223,876	—

- (注) 1. 建物の当期増加額は、増床に伴う内装工事18,541千円、資産除去債務9,400千円によるものであります。
2. 工具、器具及び備品の当期増加額は、従業員の増加に伴うパソコン5,864千円、オフィス増床に伴う什器購入等8,832千円、社内ネットワーク設備17,592千円等によるものであります。
3. ソフトウェアの当期増加額は、当社サービスに係るシステム開発費52,793千円、会計システム47,372千円、データ集積及び分析ツール19,120千円、予算管理システム6,240千円等によるものであります。
4. ソフトウェア仮勘定の当期増加額は、当社サービスに係る管理システム開発費59,389千円、社内ネットワーク設備5,078千円等によるものであります。また、当期減少額は、当社サービスに係るシステム開発費をソフトウェアに振り替えたことによるものであります。

【引当金明細表】

(単位：千円)

科目	期首残高	当期増加額	当期減少額	期末残高
貸倒引当金	107,822	126,254	107,822	126,254

(注) 貸倒引当金当期減少額のうち92,202千円は、洗替による戻入額です。

(2) 【主な資産及び負債の内容】

連結財務諸表を作成しているため、記載を省略しております。

(3) 【その他】

該当事項はありません。

第6【提出会社の株式事務の概要】

事業年度	4月1日から3月31日まで
定時株主総会	6月中
基準日	3月31日
剰余金の配当の基準日	9月30日 3月31日
1単元の株式数	100株
単元未満株式の買取り	
取扱場所	(特別口座) 東京都千代田区丸の内一丁目4番1号 三井住友信託銀行株式会社 証券代行部
株主名簿管理人	(特別口座) 東京都千代田区丸の内一丁目4番1号 三井住友信託銀行株式会社
取次所	—
買取手数料	株式の売買の委託に係る手数料相当額として別途定める金額
公告掲載方法	電子公告により行います。 但し、電子公告によることができない事故、その他やむを得ない事由が生じたときには、日本経済新聞に掲載して行います。 なお、電子公告は当社のウェブサイトに掲載しており、そのアドレスは以下のとおりです。 http://www.adways.net/
株主に対する特典	該当事項はありません。

第7【提出会社の参考情報】

1【提出会社の親会社等の情報】

当社は、金融商品取引法第24条の7第1項に規定する親会社等はありません。

2【その他の参考情報】

当事業年度の開始日から有価証券報告書提出日までの間に、次の書類を提出しております。

(1) 有価証券報告書及びその添付書類並びに確認書

事業年度（第17期）（自 2016年4月1日 至 2017年3月31日）2017年6月26日関東財務局長に提出

(2) 内部統制報告書及びその添付書類

2018年6月28日関東財務局長に提出

(3) 四半期報告書及び確認書

（第18期第1四半期）（自 2017年4月1日 至 2017年6月30日）2017年8月9日関東財務局長に提出

（第18期第2四半期）（自 2017年7月1日 至 2017年9月30日）2017年11月10日関東財務局長に提出

（第18期第3四半期）（自 2017年10月1日 至 2017年12月31日）2018年2月9日関東財務局長に提出

(4) 臨時報告書

2018年6月28日関東財務局長に提出

企業内容等の開示に関する内閣府令第19条第2項第9号の2（株主総会における議決権行使の結果）に基づく臨時報告書であります。

(5) 四半期報告書の訂正報告書及び確認書

事業年度（第18期第3四半期）（自 2017年10月1日 至 2017年12月31日）の四半期報告書に係る訂正報告書及び確認書を2018年5月11日関東財務局長に提出

第二部【提出会社の保証会社等の情報】

該当事項はありません。

独立監査人の監査報告書及び内部統制監査報告書

2018年 6 月28日

株式会社アドウェイズ

取締役会 御中

有限責任 あずさ監査法人

指定有限責任社員 公認会計士 井指 亮一 印
業 務 執 行 社 員

指定有限責任社員 公認会計士 八 鍬 賢也 印
業 務 執 行 社 員

<財務諸表監査>

当監査法人は、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づく監査証明を行うため、「経理の状況」に掲げられている株式会社アドウェイズの2017年4月1日から2018年3月31日までの連結会計年度の連結財務諸表、すなわち、連結貸借対照表、連結損益計算書、連結包括利益計算書、連結株主資本等変動計算書、連結キャッシュ・フロー計算書、連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項、その他の注記及び連結附属明細表について監査を行った。

連結財務諸表に対する経営者の責任

経営者の責任は、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して連結財務諸表を作成し適正に表示することにある。これには、不正又は誤謬による重要な虚偽表示のない連結財務諸表を作成し適正に表示するために経営者が必要と判断した内部統制を整備及び運用することが含まれる。

監査人の責任

当監査法人の責任は、当監査法人が実施した監査に基づいて、独立の立場から連結財務諸表に対する意見を表明することにある。当監査法人は、我が国において一般に公正妥当と認められる監査の基準に準拠して監査を行った。監査の基準は、当監査法人に連結財務諸表に重要な虚偽表示がないかどうかについて合理的な保証を得るために、監査計画を策定し、これに基づき監査を実施することを求めている。

監査においては、連結財務諸表の金額及び開示について監査証拠を入手するための手続が実施される。監査手続は、当監査法人の判断により、不正又は誤謬による連結財務諸表の重要な虚偽表示のリスクの評価に基づいて選択及び適用される。財務諸表監査の目的は、内部統制の有効性について意見表明するためのものではないが、当監査法人は、リスク評価の実施に際して、状況に応じた適切な監査手続を立案するために、連結財務諸表の作成と適正な表示に関連する内部統制を検討する。また、監査には、経営者が採用した会計方針及びその適用方法並びに経営者によって行われた見積りの評価も含め全体としての連結財務諸表の表示を検討することが含まれる。

当監査法人は、意見表明の基礎となる十分かつ適切な監査証拠を入手したと判断している。

監査意見

当監査法人は、上記の連結財務諸表が、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して、株式会社アドウェイズ及び連結子会社の2018年3月31日現在の財政状態並びに同日をもって終了する連結会計年度の経営成績及びキャッシュ・フローの状況をすべての重要な点において適正に表示しているものと認める。

<内部統制監査>

当監査法人は、金融商品取引法第193条の2第2項の規定に基づく監査証明を行うため、株式会社アドウェイズの2018年3月31日現在の内部統制報告書について監査を行った。

内部統制報告書に対する経営者の責任

経営者の責任は、財務報告に係る内部統制を整備及び運用し、我が国において一般に公正妥当と認められる財務報告に係る内部統制の評価の基準に準拠して内部統制報告書を作成し適正に表示することにある。

なお、財務報告に係る内部統制により財務報告の虚偽の記載を完全には防止又は発見することができない可能性がある。

監査人の責任

当監査法人の責任は、当監査法人が実施した内部統制監査に基づいて、独立の立場から内部統制報告書に対する意見を表明することにある。当監査法人は、我が国において一般に公正妥当と認められる財務報告に係る内部統制の監査の基準に準拠して内部統制監査を行った。財務報告に係る内部統制の監査の基準は、当監査法人に内部統制報告書に重要な虚偽表示がないかどうかについて合理的な保証を得るために、監査計画を策定し、これに基づき内部統制監査を実施することを求めている。

内部統制監査においては、内部統制報告書における財務報告に係る内部統制の評価結果について監査証拠を入手するための手続が実施される。内部統制監査の監査手続は、当監査法人の判断により、財務報告の信頼性に及ぼす影響の重要性に基づいて選択及び適用される。また、内部統制監査には、財務報告に係る内部統制の評価範囲、評価手続及び評価結果について経営者が行った記載を含め、全体としての内部統制報告書の表示を検討することが含まれる。

当監査法人は、意見表明の基礎となる十分かつ適切な監査証拠を入手したと判断している。

監査意見

当監査法人は、株式会社アドウェイズが2018年年3月31日現在の財務報告に係る内部統制は有効であると表示した上記の内部統制報告書が、我が国において一般に公正妥当と認められる財務報告に係る内部統制の評価の基準に準拠して、財務報告に係る内部統制の評価結果について、すべての重要な点において適正に表示しているものと認める。

利害関係

会社と当監査法人又は業務執行社員との間には、公認会計士法の規定により記載すべき利害関係はない。

以　上

-
- (注) 1. 上記は監査報告書の原本に記載された事項を電子化したものであり、その原本は当社が連結財務諸表及び内部統制報告書に添付する形で別途保管しております。
2. XBRLデータは監査の対象には含まれておりません。

独立監査人の監査報告書

2018年6月28日

株式会社アドウェイズ

取締役会 御中

有限責任 あずさ監査法人

指定有限責任社員 公認会計士 井指 亮一 印
業務執行社員

指定有限責任社員 公認会計士 八鍬 賢也 印
業務執行社員

当監査法人は、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づく監査証明を行うため、「経理の状況」に掲げられている株式会社アドウェイズの2017年4月1日から2018年3月31日までの第18期事業年度の財務諸表、すなわち、貸借対照表、損益計算書、株主資本等変動計算書、重要な会計方針、その他の注記及び附属明細表について監査を行った。

財務諸表に対する経営者の責任

経営者の責任は、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して財務諸表を作成し適正に表示することにある。これには、不正又は誤謬による重要な虚偽表示のない財務諸表を作成し適正に表示するために経営者が必要と判断した内部統制を整備及び運用することが含まれる。

監査人の責任

当監査法人の責任は、当監査法人が実施した監査に基づいて、独立の立場から財務諸表に対する意見を表明することにある。当監査法人は、我が国において一般に公正妥当と認められる監査の基準に準拠して監査を行った。監査の基準は、当監査法人に財務諸表に重要な虚偽表示がないかどうかについて合理的な保証を得るために、監査計画を策定し、これに基づき監査を実施することを求めている。

監査においては、財務諸表の金額及び開示について監査証拠を入手するための手続が実施される。監査手続は、当監査法人の判断により、不正又は誤謬による財務諸表の重要な虚偽表示のリスクの評価に基づいて選択及び適用される。財務諸表監査の目的は、内部統制の有効性について意見表明するためのものではないが、当監査法人は、リスク評価の実施に際して、状況に応じた適切な監査手続を立案するために、財務諸表の作成と適正な表示に関連する内部統制を検討する。また、監査には、経営者が採用した会計方針及びその適用方法並びに経営者によって行われた見積りの評価も含め全体としての財務諸表の表示を検討することが含まれる。

当監査法人は、意見表明の基礎となる十分かつ適切な監査証拠を入手したと判断している。

監査意見

当監査法人は、上記の財務諸表が、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して、株式会社アドウェイズの2018年3月31日現在の財政状態及び同日をもって終了する事業年度の経営成績をすべての重要な点において適正に表示しているものと認める。

利害関係

会社と当監査法人又は業務執行社員との間には、公認会計士法の規定により記載すべき利害関係はない。

以 上

-
- (注) 1. 上記は監査報告書の原本に記載された事項を電子化したものであり、その原本は当社（有価証券報告書提出会社）が別途保管しております。
2. XBRLデータは監査の対象には含まれていません。

【表紙】

【提出書類】	確認書
【根拠条文】	金融商品取引法第24条の4の2第1項
【提出先】	関東財務局長
【提出日】	2018年6月28日
【会社名】	株式会社アドウェイズ
【英訳名】	Adways Inc.
【代表者の役職氏名】	代表取締役 岡村 陽久
【最高財務責任者の役職氏名】	該当事項はありません。
【本店の所在の場所】	東京都新宿区西新宿八丁目17番1号
【縦覧に供する場所】	株式会社東京証券取引所 (東京都中央区日本橋兜町2番1号)

1 【有価証券報告書の記載内容の適正性に関する事項】

当社代表取締役岡村陽久は、当社の第18期（自2017年4月1日 至2018年3月31日）の有価証券報告書の記載内容が金融商品取引法令に基づき適正に記載されていることを確認しました。

2 【特記事項】

特記すべき事項はありません。

【表紙】

【提出書類】	内部統制報告書
【根拠条文】	金融商品取引法第24条の4の4第1項
【提出先】	関東財務局長
【提出日】	2018年6月28日
【会社名】	株式会社アドウェイズ
【英訳名】	Adways Inc.
【代表者の役職氏名】	代表取締役 岡村 陽久
【最高財務責任者の役職氏名】	該当事項はありません。
【本店の所在の場所】	東京都新宿区西新宿八丁目17番1号
【縦覧に供する場所】	株式会社東京証券取引所 (東京都中央区日本橋兜町2番1号)

1【財務報告に係る内部統制の基本的枠組みに関する事項】

代表取締役 岡村陽久は、当社の財務報告に係る内部統制の整備及び運用に責任を有しており、企業会計審議会の公表した「財務報告に係る内部統制の評価及び監査の基準並びに財務報告に係る内部統制の評価及び監査に関する実施基準の設定について（意見書）」に示されている内部統制の基本的枠組みに準拠して財務報告に係る内部統制を整備及び運用している。

なお、内部統制は、内部統制の各基本的要素が有機的に結びつき、一体となって機能することで、その目的を合理的な範囲で達成しようとするものである。このため、財務報告に係る内部統制により財務報告の虚偽の記載を完全には防止又は発見することができない可能性がある。

2【評価の範囲、基準日及び評価手続に関する事項】

財務報告に係る内部統制の評価は、当事業年度の末日である2018年3月31日を基準日として行われており、評価に当たっては、一般に公正妥当と認められる財務報告に係る内部統制の評価の基準に準拠した。

本評価においては、連結ベースでの財務報告全体に重要な影響を及ぼす内部統制（全社的な内部統制）の評価を行った上で、その結果を踏まえて、評価対象とする業務プロセスを選定している。当該業務プロセスの評価においては、選定された業務プロセスを分析した上で、財務報告の信頼性に重要な影響を及ぼす統制上の要点を識別し、当該統制上の要点について整備及び運用状況を評価することによって、内部統制の有効性に関する評価を行った。

財務報告に係る内部統制の評価の範囲は、当社及び連結子会社について、財務報告の信頼性に及ぼす影響の重要性の観点から必要な範囲を決定した。財務報告の信頼性に及ぼす影響の重要性は、金額的及び質的影響の重要性を考慮して決定しており、当社及び連結子会社9社を対象として行った全社的な内部統制の評価結果を踏まえ、業務プロセスに係る内部統制の評価範囲を合理的に決定した。なお、その他の連結子会社15社については金額的および質的重要性の観点から僅少であると判断し、全社的な内部統制の範囲に含めていない。

業務プロセスに係る内部統制の評価範囲については、各事業拠点の前連結会計年度の売上高（連結会社間取引消去後）の金額が高い拠点から合算していき、前連結会計年度の連結売上高の概ね2/3に達している1事業拠点を「重要な事業拠点」とした。選定した重要な事業拠点においては、企業の事業目的に大きく関わる勘定科目として売上高、売掛金及び売上原価に至る業務プロセスを評価の対象とした。さらに、選定した重要な事業拠点にかかわらず、それ以外の事業拠点をも含めた範囲について、重要な虚偽記載の発生可能性が高く、見積りや予測を伴う重要な勘定科目に係る業務プロセスやリスクが大きい取引を行っている事業又は業務に係る業務プロセスを財務報告への影響を勘案して重要性の大きい業務プロセスとして評価対象に追加している。

3【評価結果に関する事項】

上記の評価の結果、当事業年度末日時点において、当社の財務報告に係る内部統制は有効であると判断した。

4【付記事項】

該当事項なし。

5【特記事項】

該当事項なし。